

## 2 . 卒業生からの思い出の記

卒業生各位から寄せられた玉稿は，できるだけ原文に忠実に掲載するようにした。ただし，執筆者の卒業年次は年度ではなく，学部の卒業年で統一した。

## 思い出の記

中澤 四郎（1936年卒）

昭和8年春、私は、修業年限3年の駒大専門部高等師範科歴史地理科（地歴科）に、地歴の中等教員資格取得を目指して入学した。地歴科5期生で、28名入学したが卒業時は21名であった。上級生は少数であったが秀才揃いで、中には3年生（3期生）に条里研究で学界に名を成した深谷正秋氏、台湾に帰ってから国際的な気候学者となった黄蓮指氏らがいた。駒大には外に2年制の予科、3年制の3学科、専門部には国漢科、禅学科があった。

曹洞宗立のため学生は殆どが寺門の子弟であったが、地歴科だけは私の様な修学目的の学生が半数いて、異色なクラスと見られていた。今の大学の様に男女共学の潤いはなく、女性と言えば修学期間の短い別科に1~2名の剃髪で黒い尼僧服を纏った学生と、大学事務局に和服に袴姿のタイピストと事務員、給仕が数名居た程度と記憶している。男子学生は黒いサージの制服又は和服に袴姿で、何れも大学生を象徴する角帽を着用していた。

入学前の昭和6年に勃発した満州事変を契機に日本軍の侵攻が急速に中国全土に及び、学園も否応なしに軍国化に向かって流れて行った。代々木練兵場における天長節（4月29日）の観兵式には配属将校の引率で全学学生が参加した。同9年満州帝国が成立するや、5日間に及ぶ千葉県下での野営演習、続いて歩兵学校見学、横須賀軍港、戦艦三笠の見学などが矢継ぎ早に実施された。時局柄カフェ、バーへの立入禁止が

校門近くの掲示板で公示された。11年の卒業後は戦局急迫、やがて太平洋戦争へと続くが、私もそうであったように級友で徴兵された者が多く、5名が戦陣に散った。4人に1人が戦死したことになり、外に戦傷を受けて傷痍軍人として復員した者もいる。

在学中の学習活動を思い出すままに記す。地歴科生は全員駒大地歴学会会員で、教授もメンバーであった。学会の研究発表会は定期的に活発に行われ、卒業生にも発表の機会が与えられていた。私も簸川平野の砂丘の土地利用について発表したが、批評を兼ね脇水鉄五郎教授から貴重なサゼッションを頂いた。講演会は随時行われ、他大学の教授、学者が招聘された。学生の研究サークルもあった。私は古典研究グループに入って、歎異抄と方丈記について2回意見発表をしたが、1期生の先輩会員から読みが浅いと指摘され、大いに勉強になった。

巡検のことを実地踏査といていた。浜田真名二教授引卒の江ノ島、三浦半島巡り、綿貫勇彦、浜田両教授指導の利根川乱流地域調査、綿貫教授引卒の陸軍省参謀本部陸地測量部（現国土地理院）見学、同教授指導による昇仙峡、甲府盆地の条里調査、小林元教授引率の銚子、佐原方面調査、圭室諦成教授による伊豆半島史蹟調査、北田宏蔵教授引率の多摩天文台見学、綿貫教授による多摩川デルタの土地利用調査、同教授による3泊4日の東北地方修学旅行などが印象に残る。その他世田谷中学駒沢高女での教

育実習，大学キャンパスでの測地測量実習，学園祭に地歴科をアピールする為に作った巨大な貼りボテの地球儀作成の苦労などを思い出は尽きぬ。

卒業の年 11 年 2 月 26 日は夜来の降雪で帝都は 30cm 以上の降雪で銀世界となった。朝暗いうちからラジオが何やら重大事件の発生を思わせる情報を流していたが，当時は未だテレビはなく，事情がサッパリ分からない。大学はたまたま卒業試験の最中で，登校を急ぐけれど，大雪と，後で知ったことであるが三宅坂など要所を占拠した歩兵第 1，第 3 連隊将兵約 1400 余数の反乱軍のため交通機関は麻痺状態であった。大学には遅く着いたが遅刻する学生が多く，試験は大幅に遅れて実施された。これが日本を揺るがす 2・26 事件当日のプロフィールである。

想えば慌ただしく過ぎた在学 3 年間であった。同 3 月卒業後，郷里の島根へ帰ったが，続いて大阪市立の中等学校に就職が決まり上阪。3 年後県立松江高女に転任。かくて 40 年間教職ひと筋の生活を続け，同 51 年春定年で職を辞した。教職の後半 13 年間は中学校 1 校・高校 4 校の校長として県内各地に移り住んだ。公職を離れて平成 4 年にライフワークとしていた「隠岐・出雲・石見の条里制」を自費出版し，研究活動を総括した。同 5 年春の叙勲で勲 4 等に叙せられ，瑞宝章を賜った。受賞当日は家内同道，宮中に参内。天皇陛下より長年の職務精励を嘉せられ，労いのお言葉を賜ったことは，終生忘れ得ぬ感激であった。これも母校駒沢で学んだ学習の成果であったと，衷心より感謝している。

## 歴史・地理の本領

### 高木 久（1940 年卒）

私は女学校の，歴史と地理の教員資格を得るために駒澤大学専門部歴史地理科を選んだ。学問的知識はゼロのため，教授は全く不可解の存在であった。何もわからぬまま入学したが，歴史地理科の有名な教授陣に恵まれた環境に入学したことは，幸せの第一歩であった。学生達は全国からはもちろんのこと，満州人，台湾人の学生も同クラスとなった。約 40 名の学生が居り制服・制帽姿であり，現代風のアルバイト生はいなかった。

歴史学，地理学の広い学問の世界にとまどい

と重圧感であった。それまでの自分は，歴史・地理とはそれぞれの知識を「暗記」覚えることだと思っていた。しかし，表面的な流れの追求から，その本質に考えを向けることの重要性を次第に理解するようになった。

歴史の圭室先生からは，歴史学の本質を学び取って行った。社会の構成を調べ，その動きの関係，その中から発生する問題を考えることに興味が生まれた。地理の綿貫先生からは，地理学の本質を解明させて頂いた。

生きている学問，現在を未来を見通す学問，

それは我々社会生活にとってはなくてはならない指導性、現実性を持つ学問であった。人の生活舞台である自然、そこがどのような自然条件であり、どのように変化・発展をしてきたのか、人間の社会生活とどのように結合して来たからなのか、歴史の変化と土地条件の結合した姿の追求を学んだ。

人間の生活舞台である自然がどのような条件であり、どのような可能性を持っているのか、いわゆる地域性を調べるのが地理であり、その自然に働きかける条件を変化の中でとらえるのが歴史であろう。地理と歴史の結合された学問を知り得た。

自然はそれぞれが可能性を持って準備されている。ある地域の可能性、そこに人間社会は生活の場として働きかける。この自然と社会の交点、接触点にその時々地域性が現れる。地理と歴史の接点を動きの中でとらえ追求していくのである。

駒澤に入学し、地理学の本質を学んだことは、忘れられない喜びとなった。昭和 15 年卒業以

来、女学校の歴史・地理の教師として専任した。歴史・地理は暗記物の教科とされていた。地域の姿、在り方を暗記するものと考えていた。時代の動きの中で、なぜ、どうしてと考え抜く姿勢はなかった。固定的観念を暗記し、覚えることは忘れることになる。動きのないところには生命感はない。

一つの地域を見る場合、その自然条件は生活にどのような意味・可能性を持っているのか、そこにどのような生産手段で働きかけたのか、自然と人間社会の動きの中で、地域の特性を理解する。地域性の把握であり、暗記し動きのない知識を否定する。なぜそのような姿になるのかを時代の動きの中でとらえ、考えていくことが、歴史・地理の本領と教育した。

生涯自分の学問とし、教育にたずさわった基本理念は駒澤大学において多くの先生方から受けた影響と感謝をしている。中でも歴史学の圭室諦成先生、地理学では綿貫勇彦先生の賜と感謝している。それに赤峰倫介先輩からは直接指導を受け、感謝である。

## 追 想

### 白井 恒文 (1944 卒)

傘寿を過ぎ 60 有余年以前の思い出は定かとは言えませんが、こうして生活を送る事が出来るのも教壇に立つ事が出来たためとの思いから、在学時代の思い出を記します。

駒沢在学中特別身近にご教授頂けたのは、綿貫勇彦先生で、先生の聚落地理学と日本地誌の

講義もさることながら、武蔵野台地の実地指導や、三浦半島一週の巡検（三野与吉先生も地形をご説明）等非常に懐かしくまた楽しい思い出となっています。

当時綿貫先生指導の農村研究会に所属し、神奈川県津久井郡青野原村と青根村に 15 日間、暑

中休暇の前後に入村して調査する事になり参加しました。調査のいろはから教えて戴きました。旅館での協同生活が、田舎者の私には珍しく新鮮に感じられました。調査を終え、帰りに道志川段丘上の旅館より中央線与野まで約3里と読んで地図を頼りに軍歌等歌いながら山越えし、桂川の段丘を眼下に見下ろした時は、流石に皆で歓声をあげて喜び合ったことでした。

その後2年生になってからは、殆ど毎日のように、研究室に集まって、先生の指示を受け、統計表や作図に努力しましたが、東大法学部の教室で開催された地理学会の発表会に、私達数人が分布図や人口構成図・動態図・階層別図・統計表等、持参の図を黒板に貼り、綿貫先生が「道志川沿岸山村の研究」と題して発表され、これは学生との共同研究であるとされましたので、矢張り先生は僕達を認めて下さったと感激し合った事を覚えています。その後大東亜戦争に突入し、3月の学年末試験後の学徒勤労奉仕隊で、毎朝5時起きして板橋の兵器補給廠へ通い、栄養不足や試験後の無理もたたってか肋膜炎となり、2年間も休学を余儀なくされ、やっと復学した時初めて綿貫先生のご逝去を知って驚き、かつて一緒にお訪ねした友も無く、1人で西大久保のお宅に参上し、小さな御位牌を前にして目頭の熱くなるのを感じた事が昨日の事のように思い出されます。幸い新しい学友の中に井関弘太郎君も居られ、また私が農村研究会員だったという事で、急に新しい友も出来、これ

も綿貫先生のお陰と有難く思いました。井関君は吉村信吉先生の「陸水」で研究していると聞いて驚きました。卒業前に京都大学に入学許可された方でした。

多田文男先生には地形学を御教授戴き、農村研究会でも種々ご説明戴くことができました。当時東大助教授の気鋭の先生は、ゴビ砂漠探検隊長として大陸に赴かれ残念に思いましたが、地形学の後任教授は渡辺光先生で、ほっとしました。戦後私は上田松尾高校に勤務し人文地理の授業の際、生徒の質問に答えるべく、上田市東郊の段丘上の染屋台の条里遺構の調査に取り組むことになり、立体鏡用の上田付近の航空写真の入手の為上京、駒大に井関教授を訪ねた際、多田先生にもお会いでき、段丘についても御教授戴くことができました。航空写真なら私ごと、その後直ちに送って戴き感激しました。尚先生には、その後拙宅で宿泊頂き染屋台や千曲河畔の自然堤防のご教授を戴くことが出来、戴いた抜き刷りの「地理 初山政子の対談」のお話等伺いながら、千曲河畔の料理屋の鮎や鯉料理で一献傾けさせて戴いた事が思い出されます。また日本文化史のご教授を戴いた木代修一先生より、千曲川河畔の屋代の自然堤防の発掘の件についてお伺いが出来たことも、後に歴史地理学会で「信濃国更級郡村神郷と条里遺構」と題し、京大での発表の際の参考になり感謝いたしております。

## 在学中の思い出

中島 義一（1947 年卒）

私は昭和 19 年に入学し、22 年に卒業しました。ということは入学したのは戦時中、在学中（2 年の時）に終戦になり、戦後の混乱の内に卒業したことになります。あの時代ならではの思い出の幾つかを綴ってみましょう。

### (1) 地形図

戦前はすべての中学校以上の学校で軍事教練が課せられ現役軍人の配属将校がいました。駒大も例外ではありません。戦後授業が再開された時、教練用の銃器庫跡へ行ってみました。兵器はすべて回収されて一つも残っていませんでしたが地形図が多散乱していました。当時地形図は販売されていなかったのでこれは貴重品と早速地理科の学生達で頂いてしまいました。今手許にある 5 万分の 1、御殿場、佐倉、八日市場、浜松、いずれも駒澤大学教官室の印が押してあります。

1 年の時軍事教練の時間に 5 万分の 1 御殿場を使って作戦を立てさせる課題が出たことがあります。地図の見方を教えてくれと他学科の学生達がやってきました。「よしよし教えてやるから何でも質問しろ」と大口をたたいたのは地理科の中で一番勉強しないグループの人でした。

当時駒大の銃器庫（今博物館になっている建物の 1 階）には数百の小銃（38 式歩兵銃と 44 式騎兵銃）と十数個の軽機関銃（11 年式と 96 式）がありました。今の駒沢公園は教練でしばられた場所ですし、二子玉川まで銃をかついで

走らされたこともあります。

地形図を売ってないのですから地理実習の先生はたいへんだったと思います。どこの地形図を準備してこいと言えないのです。どこの地図でもよいから探してこいというわけです。実際意外なところで地形図の古を売っていました。古本屋ならぬ一般の住宅に「地形図あります」の貼り紙があり、我々はどこの地図でもよいから買い漁りました。発電所等の土木工事に使ったものが多かったようでした。

### (2) 山羊と猫

駒大に入学した時カバンを買いました。一見革カバンのように見えます。当時革は軍事物資で使用禁止ですから何か代用品だろうとは思っていましたが何だかわかりません。駒大の校庭に草原のところが、誰が飼っているのか山羊がいました。頭をなでているとぬっと首をのばしてカバンをバリバリ。何とカバンは紙でできていたのです。持ち主が何だかわからないのに一瞬に紙と見破った山羊の眼力に驚きました。今の禅研究館の付近です。

食糧難の時代なので校庭にイモ畑が作られていました。時の学長山上曹源先生は自ら農作業に精を出されていました。ある男がどこからか猫の死体を見つけてきてイモ畑の中に埋めておきました。そうとは知らぬ学長先生、猫の死体にふれて飛び上がって驚いていましたがそれを物陰から見ていて手をたたいておもしろがっていたイタズラ学生がいたのです。それが何科の

誰だか知りません。

### (3) 地理の先生方

在学中教えを受けた地理の先生方は下記の方々です(50音順)。

浅香幸雄, 岩田孝三, 内田寛一, 河田喜代助, 北田宏蔵, 多田文男, 辻本芳郎, 中野弘, 三野与吉, 渡辺光, このうち専任は北田先生だけ。今では考えられないことですが当時はこれが普通で, 他大学も似たような状況だったようです。

北田先生には好感をもてませんでした。他の先生方よりは暗い印象で若者の気に合わなかったのでしょうか。亡くなられたことを知っても御葬儀にも伺いませんでした。紙碑を読んで驚きました。2人のご息子が相次いで戦死されたとのこと。私どもが習ったのはその頃のことです。先生はご息子のことを教室で一言も話されませんでした。そういう状況で明朗になれるわけがありません。先生は悲しみに耐えて懸命に授業をしておられたのです。知らぬこととはいえ, 本当に先生には申し訳なかったと思っています。

先生方に今想い出して感謝申し上げたいのは次の2点です。

① 非常勤だからと差別なく, 教室の内外を問わず本務校の学生同様に懇切にご指導くださったこと。

② 本務校の学生や, 他の兼務校の学生を積極的に紹介され, 親交を結ぶようすすめて下さったこと。その頃から永くおつきあいしている同好同学の友が少なくありません。出身校が違いますから同窓ではありませんが同じ先生の指導を受けた同門です。同門の存在は大きいと思います。

後年自身が大学の教師になってからは私も①と②の両方をつとめるよう努力しました。それが恩師の先生方の学恩に報いる道であると信じたからです。駒大と他大学と合同の私的巡検をよくやったのもその為です。

### (4) 教育実習

その頃は教育実習は制度化されていませんでした。経験なしでいきなり教職に就くのは不安だからと学生側から要望したところ直ちに実現化して姉妹校である駒沢高女と鶴見高女で全員が1時間ずつ授業をさせて頂きました。駒女では村瀬慶三, 和田謙寿両先生, 鶴見では酒井文英先生, いずれも駒大地歴の先輩が親切にご指導下さいました。私にとっては駒女3年の地理が生涯最初の授業ということになります。和田先生は後年駒大仏教学部教授になられたので晩年再度親しくさせて頂きました。

### (5) 卒業後のこと

恩師の先生方のうち, 卒業後も永くご指導頂いたのは内田, 多田, 岩田, 浅香, 辻本諸先生です。出版社・中学・高校・他大学の勤務を経て思いがけず母校に奉職でき, 多田先生はまた身近な方になられました。内田・岩田両先生は地理教育学会で, 浅香先生は歴史地理学会でそれぞれ会長御在任中に若手役員を務めさせて頂きました。本務校の研究室やご自宅に何度も訪れました。特に岩田先生の浦和のお宅にはしばしばお訪ねしてご指導頂きました。5人の先生はいずれも故人になられ, 改めて多年のご指導に感謝申し上げ, ご冥福を祈る次第です。

卒業して57年, 定年退職して7年, 喜寿を迎えて母校を思う気持ちががいよいよ深まる今日この頃です。

## 在学当時の思い出

井高 帰山（1947年卒）

### 世相

私の在学当時の世の中の状態は戦時下で全く異常の時代であったから、話が非常識にわたる場合があることを頭において欲しい。

例えばこの様なことである。統制経済下で物資がなく、食料が特に乏しかった。物資統制令と言う厳しい法律があった。この法律を犯して闇の（流通の）食糧を手に入れることは、国民は悪いことと思いつつながら、日常生活のためこれを犯すことはあたりまえのこととなっていた。

ある日の新聞に、「配給の食事のみに限定して正しく生活をしてきた裁判官が、闇の物資を頑固に拒絶していたので、夫婦ともに栄養失調で死んでしまった。」という記事があった。こうした正常な方が生きることができず1億人（日本の総人口）すべての人が（オーバではない）何らかの形で法を犯し、不正をしていたのだ。1億人皆嘘をついていた。それが生きる為の大切な重要条件だった。全く日本人はすべてが恥をしのんでいた。そのような時代を背景にした学生であったことを忘れないで読んで欲しい。

昭和15年には、神武天皇即位日本建国紀元2600年、全国でお祝いの行事があり、上を下への大騒ぎであった。大政翼賛会という全国统一された思想の下で一人一人が日の丸の旗を振っていた。私もその一人なのだ。14歳。

### 入学は変則だった

程なく太平洋戦争がおこり、17歳の栄養不良の貧弱な少年が出来上がっていた。戦いが熾烈

の状況の中で昭和18年4月駒澤大学専門部歴史地理科に入学。

この年の入学は戦時下、人的資源の確保のため日本の上層部は旧制中学制度を5年制から4年制に改正し、これに移行するためこの年の入学試験は5年生と4年の希望者と共に受験をすることになった。

旧制4年生だった私は、中学5年に進級していった友達諸兄に別れを告げていち早く駒大専門部に入学を決意し実行した。戦時には心落ち着いた教育はどこにも無い。だからほとんど迷うことなく受験をした。合格率は2~3人に1人の割合とのんびりとした受験だったと思う。しかし5年生の先輩でも不合格の方もいた。

### 親の心と自分の希望

私の家は祖父の代から陶業をしていた。幼児から見よう見真似で土で遊んでいたから自然と「将来焼き物を焼こう」という気持ちは備わっていた。父は自分の義父であり師匠であった友田安清がワグネル（明治お雇い外国人の1人）の弟子で、地質鉱物学に造詣深く窯業の「もと」である原料に通じていたことから、現在の自分の窯の為には地歴的要素が必要と思っていたらしい。デホルメよりデッサンより、エッチングより、何よりも当時駒大の地歴に、淡路島に縁のある綿貫勇彦・浜田真名二両先生が居られると聞き及んで父（先代帰山）は、自分の故郷淡路島を忍んだのか、早速駒大の地歴に私を入学させることを決めた。

## 学舎と友達

石の門柱を入ると木造校舎が向かって右に 2 つあり、長い木造の廊下でつながっており、校舎の裏には当時すでに、他にたぐいない立派な図書館があった（現禅文化歴史博物館の建物）。ほかに資料を見れば分かる通りの中庭のある旧館と講堂のある新館などがあった。今は大学に資料が集積されているので説明を省く。最初はこの木造の校舎で授業を受けた。半年程になってようやく周囲が分かるようになった時、学生の中にはすでに地理学者の域に達しようとしている人がいるのを発見した。これが中島義一氏（後の駒大名誉教授）で、私が学生として幸せだったと思うのは、まずこの人に巡り合わせたことである。中島氏は 5 年制中学を卒業後入学、私は 4 年修了生だったこともあり、どう考えても太刀打ちはできなかった。彼はすでに麻布中学で部活動を鏡味完二先生の元で修業をしていたし、地理学一辺倒で基礎的な知識や研究の方法の集積が有った。私はただ未知の話面白く聞いているだけで時間が進んでいった。見るもの聞くものみんな地理で、黙っていると（分かるような顔をしていると）学問の妙諦に近づくような気がしていた。だからすべてに不自由な戦時中とはいえ私だけは、幸せな学生だった。しかし淡路島に縁のある綿貫勇彦・浜田真名二両氏はもう居られなかった。

## 駒沢の特色

大学のよいところは禅学にその根源が有ったと思っている。仏教・座禅は必須科目。自分は世田谷中学在学中は宗内生（中学入学時在家得度）として修行しすでに 4 年間座っていた。でもそんな顔はできなかった。通常な学生のような顔をして、「痛いことは同感と」座禅不賛成を

装って、中島氏とよく図書館へ逃避行をした。

教授陣の出征のため休講も多く独学自習のようなところもあったが、一方戦地ではものの役に立たないような老骨の優れた先生方に指導された。結局帝国大学・文理科大学など、そのころ少なく貴重な存在の博士や、得難く勿体ない北田宏蔵・内田寛一・渡辺光・多田文男・井上春雄先生などお墨々の陣営であり幸福だった。

## 学問―「駒沢地歴」の存在

当時駒沢は地歴の特殊性に誇りのようなものを持っていた。私が入学したのは地歴科であり、先輩方から駒沢の地歴科としてのお話を色々伺うことができた。「ただの地理ではないんだ。ただの歴史でもないんだ。一般にわれる歴史地理でもないんだ。動態地理学？変動的な物の見かた？」新しい言葉を黙って聞いているうちに何かわかるような気がして納得することができるような青年期の独特の興奮に近い精神状態がそこにはあった。尊い故赤嶺倫介先輩の赤ら顔が私に吠えていた。故市田先輩、故井関先輩は物静かに語りかける人であった。師走、三軒茶屋の老舗鳥正の店先では忙しく鶏肉販売に従事しながら、後輩にいろいろと指導をしてくれた桜井正信先輩がいた。的確な禅語にも近い先輩の名言がその口はしに出る時、若者は深く心を打たれた。

## 運命に近い地理科・歴史科の分割

そして学内の方針で折角「駒大歴史地理」の立派な方法論と関係なく、専門部歴史地理科は地理科と歴史科に否応なしに分割された。分割されたわけは学生に知らされていない。授業数の 1 科目少なかったのが地理科だったと記憶している。1 学級 30 人入学して半分の 15 人ずつとなり裂かれるような不思議な分かれ方をした。

入学時のことや先輩の言葉を思いだして混乱した頭で「どうでもいいのじゃないんだ」と心で叫んだ。

### 戦争と書籍

戦争が激しくなってきた東京が空襲に備え下町や、建物密集地の強制疎開が始まり、そろそろ本屋が疎開し始まるころ、私の傍らで神田の本屋へ地理の雑誌を買いに行くことを勧めてくれたのも中島義一氏。古今書院など殆んど残った分のバックナンバーをそろえることに終じたので、重い写真入の地理学誌や有名な教授たちの記念論文集など何度も何度も持てる限りの本を買いに通った。都下一斉の疎開の頃は割安に買うことができた。これらの本や雑誌はこれ以後本屋もなくなり入手出来なくなったから、友人や後輩の遣い料になり、役に立ったと思う。

### 軍事教練・学徒動員令

大学の（キャンパス）の東南に700坪程も有ろうかという広場があった。図書館（耕雲館）より南方という事になる。この場所は平常時の運動場であった、我々が入学してからは軍事教練の訓練場になっていた。ここから駒沢ゴルフ場（現駒沢公園）は田んぼを隔てて心が癒される風景。教官室には初老の長沢退役大佐がいた。大佐は学生の味方となって、荒い若い配属将校達からの風当たりを防いでいるような暖かい存在と思った。

年に一度の軍部指導による査閲は厳しく行われた。

2年となつてすぐに我々専門部学生は授業を受けることなく、学徒動員令によって川崎市の軍需工場へ通うことになる。場所は南武線の矢向駅、川崎に向かって右に行き200mも進むと左右に古河鑄造株式会社があった。雨の日は道

路が泥沼のようになった。右側に本部があった。飛行機の発動機の外套（カバー）を圧鑄（アルミダイキャスト鑄造）する為の仕事を与えられた。一切敵国語は使わない（英語－敵国語）という間違った考えが堂々と世の中の主流を流れていた。

仕事には難解な仕事から重労働の火熱作業、荷重の搬送作業があり、また事務・庶務そして簡単な作業もあった。学生はそれぞれの部所に配属された。配属はどのようにして決められたか分からない。私や中島氏そして歴史の芥川龍男氏国漢の佐藤成美氏などは比較的穏やかな部所にあつたと思う。送電の計器板がある変電所は工場の心臓部にあたるので、屋外に背丈より高い板囲いの土塀が廻らされていた。外部から遮断されたその仕事場で一時間一度のメーター記録、幸いに勉強の時間を作ってくれた。

しかし多くの学徒は忠実に御国のために頑張った。こんな風にばらばらの部所に配属されて顔を合わすことも無い学友達はいつのまにか挨拶もなく入営・出征をしていた。これは後で分かったことだ。

### 川崎の猛爆

2年生の春1944年この工場周辺では昼間グラマン戦闘機の機銃掃射があつた。暗くなって米軍B29爆撃機の波状の猛爆によって川崎全体が一夜にして焼失、夜勤者の中には逃げ切れない人が大勢でた。全く紙一重の人生であります。予科の故高橋宏哉氏の記録では「火の中を潜り抜け自坊まで命からがら逃げ帰った」と、氏の文書に記されている。焼死した友人知人もいたとの事であるが、一切不明の状態であつた。鑄造会社焼失後は各自郷里に帰っていた人も多かつたように思う。戦場で戦死した友達たちはそ

れぞれ意義深く祭られたが、この様な人もいたのだ。悔しくて悔しくて心のそこからもう戦うまいと思い、また心に誓った。

教官室から呼び出しがあり、かしこまると長沢大佐から「聖戦酣の節、軍の骨幹たる将校となるため甲種幹部候補生を志願しないか」とお誘いがきた。すでに友達から前もって聞いていたので即座にお断り申し上げた。

### 軍需省勤務

工場を失った駒大専門部学生はどうしたか？駒大内の運動場とゴルフ場の一角が軍需省の運輸部となり、後部を切ったタクシーに、荷台になる函と木炭を燃やしてガスを取る設備をつけた貧弱な木炭トラックが十数台ほどあり、ゴルフ場の土手には晴海辺りから陸揚げされたものか、ドラム缶が数10本？ほどが埋められ草で偽装されていた。学生はもうバラバラで皆顔を逢わしていない。食べ物食べられれば好いというような日常であったから。

その後、軍需省船舶部に在籍する事になった。軍需省（緑地の中に日の丸を翼につけた白い飛行機）の腕章をつけた。これがなかなか便利で各交通機関では無料。船舶部は新橋の大阪商船の建物を占拠していたので新橋に8月の終戦までいたことになる。焼け野原の東京を地下鉄でまじめに通っていた。

### 戦後

食糧難に喘ぎながらも校舎に戻り、軍に行っていた友人も軍服姿で戻り、貧しく不自由であったが平和な日々を迎えた。貪りつくように教授の話聞き、目に涙を溜めながら一生懸命になって生の声のありがたさを知った。しかし諸事情の逼迫した世相から、全く学問どころの騒ぎでない学生が大勢いたことも併記する。榮養

失調という言葉が流行り、実際に食糧事情は底を突き、みな命掛けの日々を送った。

教授岩田孝三先生の北浦和の家に早稲田の学生と集まったり、フィールドを歩いたり学問の仕方を実際に学ぶ事が出来たのは、戦時中独学で励んだお陰。8月から翌3月、卒業までの足掛け1年と8か月は、まことに充実した長い中身のある学生生活とと思っている。その間には多田文男先生の指導で当時の文部省資源科学研究所（新宿区百人町）によく遊びに行くことができた。地質図も見ることができたし、小笠原義勝先生・中野尊正先生・入江敏夫先生など数多くの外部の先生は優しく高級な指導が受けられた。

旧館構内での河田喜代助先生の鉱物学は面白くきれいにノートをとることができた。レンガの3階建ての教室が懐かしい。

当今「本邦磁器黄色顔料の研究」井高帰山（陶磁協会誌「陶説」第600号2003年2・3・4号に掲載）を表すのに非常に役立った。（今までフェルグソン石と呼ばれたり、苗木石と呼ばれたりした鉱物と黄色顔料になる石の性質等を究める話である）。世の中から「陶磁器の秘法を公開することは古今にわたり珍しい」と褒められたりして、駒大地理学に学んだことを大いに感謝している。

終戦は戦時色一掃のこともあって戦時下の教職指導者、学長以下が追放の波をかぶった。年を経た先輩のような同級生が主体となってストライキを決行した。丁度我が師匠山上曹源先生は学長であったので追放の形となった。卒業してからの永平寺行きは（禅学の出席も悪かったか？）教職を追われた師匠から「焼き物屋の小僧が・・・見込みが無い」と断られた。

卒業後に私は多田文男先生のお蔭で農林省の開拓局に勤める事になった。一方我が家では年老いた陶工の父が手助けも無く老境の日々になっていた。私は古い思想のためか（長男で）年寄りを抛って置けなかった。1年間の修行、農林省勤務の後家業に入ることになった。故入江敏夫先生などにはこっぴどくのしられ裏切り者呼ばわりされたものである。「決して物にはならないだろう」！

私は本当にそう思って悲しかった。多田文男先生の愛情は忘れていない。今でも悪者に甘ん

じて恥じている。そして動乱の駒沢時代を無事に過ごせて、心暖かかった学友諸兄にも皆共に感謝している。

## 後記

このたびの地理学科の75周年は誠に謹んで、祝御同慶の至りであると共に夢のようでもある。55年前その基礎となった専門部の地理の昔語りを御披露したこととなり、諸兄の参考になればと思う。記事に間違いがあるやに思い同級の芥川龍男（法政大学名誉教授）氏に目どうしをお願いしたところ、校正を頂き恐縮している。

## 思い出の記

### 石川 雄造（1948年卒）

#### 1. 終戦前後

17回生(1948年3月卒)として入学したのは、戦争末期の1945年7月であった。当時は、毎日B29の空爆をうけ、そのつど防空壕に身をよせるなど授業ができる状況ではなかった。

入学後、まもなくして、私たちは、大学の近くにあった軍需工場に動員されるグループと、大学に居残るグループに分けられるなど暗い日々が続いた。そして8月15日を迎えた。

校門入口の守衛室前に集合させられ、いわゆるラジオによる玉音放送を聞き、この先どうなることかと心配でたまらなかった。

その後、大学の方から歴史地理科の授業再開は、いつになるか分からないので、他大学への進路変更も含めて、自宅で待機するようにとの連絡があった。

幸いにも、授業の再開は予想よりも早い9月から実施された。10月頃になると、復学や転入者も増加し、研究室にもようやく賑わいがみられはじめた。

#### 1. 授業再開

授業は再開したが、専任の先生はおらず、講師として内田寛一・多田文男・三野与吉・岩田孝三・辻本芳郎・浅香幸雄・河田喜代助の諸先生からご指導をいただいた。特に印象深かったのは多田・岩田両先生であった。

地形学、アジア地誌を担当された多田先生は、タクラカマンやゴビ砂漠、シルクロードと関連深い都市の生成、歴史の中で変化した地形や遺跡の構造に言及されるなど、フレッシュな講義が多かった。一方、多くの学生に声をかけてくださるなど、面倒見のよい先生であった。

もう一人は岩田先生であった。先生は、授業をはじめの前に、黒板いっぱい大きな文字で map riding と板書され、5 万分の 1 の地形図（土地利用図）を掲示し、熱のこもった授業を展開されたもので、2、3 年の先輩や、歴史科の学生も受講するなど、教室はいつも満員であった。しかし、残念なことに、1946 年 1 月、GHQ から教壇追放ということになり大学を去られた。下の写真は、岩田先生の送別記念写真である。最前列の左から 4 番目が岩田先生、5 番目は辻本先生である。着帽や服装から、当時の学生気質の一端を垣間見ることができるのではないかと。

#### 1. 17 回生あれこれ

地理科を卒えたのは 40 名で、どの回生よりも卒業生が多かった（歴史科は 19 名）。それだけに、多様な顔ぶれのものも多く、楽しく学生生活を過ごすことができた。今でも、駒大地歴同期会には参加者も多いと聞いている。

戦争末期から終戦後の困難な時期に在学したので、学際的な研究ができなかったのは残念ではない。しかし、好士の士は、現職のまま進学できた法政大学への学部編入や大学院へ進んだものも多かった。いずれにしても、半世紀前の思い出の一端を記述してみた。

（前 秋田経済法科大学非常勤講師）



（写真） 岩田孝三先生の送別写真

（1946 年 1 月，大学校舎前）

## 人生行路の指針を育んだ学生時代の思い出

長野 <sup>ただし</sup> 覺（1950 年卒）

1945（昭和 20）年 8 月 15 日の第 2 次世界大戦終結時に、私は福岡県香春町の浅野セメント工場で、県立田川中学 5 年生の学徒動員によって 3 月の卒業式もないまま延長就職していた。突然の敗戦で、今までの国土決戦・米英撃滅の心意気は一挙に瓦解し、虚脱感と解放感の混沌とした日々が続き、就職したまま自分の将来を考えるまでに凡そ 2 年の歳月が流れた。小中学校で好きだった地理を大学で勉強してみたいと

いう衝動に駆られ、19 歳の春に上京を決心したのが地歴科地理専攻志望の動機であった。

昭和 22～25 年当時、渋谷から二子玉川までの玉川電車沿線は、戦災による焼跡や瓦礫が散在し、米英連合軍占領下の厳しい経済統制で、公定価格の主食や衣類は一人当りの消費量が割り当てられ、日本国民全体が貧しく耐乏の学生生活を余儀なくされた。

《学友寸描》

第20回地理専攻12名の学友(卒業は10名)は、年齢も服装もさまざまであったが、禪の大学らしく5名は寺院の出身である。岡山県西江原町(井原市)法泉寺の先納親道君は学徒出陣による復員入学のため最年長で私より5歳も年上、専らオヤジの愛称で親しまれた。軍服のコートでよく登校した前田拙堂君も満州からの復員軍人で、出身は鳥取県三朝村(町)徳林寺、2年生のとき御尊父が亡くなられ住職継承のため皆に惜しまれながら中退した。武骨な和尚の風貌があったのは熊本県天草郡教良木河内村(松島町)寺院の岩崎達道君(故人)。最も若い好男子の木島昭雄君は埼玉県明覚村(都幾川町)徳昌寺。若くて粹な東京人らしい夏目宏志君は新宿育ちだが実家は静岡県藤枝町(市)宗乗寺である。

残る7名は俗人で、横浜市保土ヶ谷区の自宅から通学された紅一点の明るい樋口(茂呂)喜美江さんの存在は、教室のムードを和らげて下さった。1~2年時のクラス委員は信州諏訪湖に近い湖東村(茅野市)から上京した伊藤益郎君で、村長の愛称だった。得意の正調木曾節は、通常の流行歌曲とは異なっており傾聴させられた。岩手県福岡村(江刺市)出身の菅野葭君は、一見おっとりしているようだったが行動力旺盛で、東京学徒援護会を拠点に銀座や上野公園界隈でアルバイトに専念するときは、ハンサムの夏目君や木島君を駆り出しサクラにして売りまくったらしい。3年時のクラス委員である。兵庫県尼崎市出身の栗山稔君は超真面目な模範生で、御尊父は元日本大学工学部教授。アルバイトも連合軍行政顧問宿舎の夜間警備職員を勤めながらの勤勉家であった。その勤勉さにひかれて道玄坂上のお宅をよく訪問したが、正月に雑

煮を御馳走になった時、東京は四角餅に澄まし汁だけであることを知り、福岡は丸餅に鰯や野菜などを入れるのと大違いであることに驚いた。

九州男子を代表したような熱血漢の松田實君は佐世保市に近い長崎県佐々町出身で、世田谷の松蔭神社近くの下宿し、私の下宿とも近かったので行き来した。その熱血ぶりは卒業と共に更に発揮して医学博士への道を邁進した。以上はクラスメートの寸描紹介であるが、卒業後のことも最後に付記したい。

《専任教師零からスタートした戦後の地理科》

多田文男先生の「駒澤大学地理学科の生い立ち」(駒澤地理14号、昭和53年)によれば、第2次世界大戦後の昭和20年から22年度まで、地理科は専任教師が不在で、凡そ10名の兼任講師で支えられた。ようやく23年度に井関弘太郎先生(昭和19年地歴科卒業)が京都大学地理学科を修了し、専任講師に迎えられ地理科に活気が湧いた。尤も当時2学年の私が思ったことは、たとえ専任講師が多くても、東京大学・東京文理科大学・東京学芸大学の著名な地理学者から、直接指導を受けることを誇りに思いながら受講し、日本地理学会で講師の先生が研究発表される時は積極的に聴講した。

東大の多田文男先生は駒大地理科のボスの存在で、地形学では人力による改変に注目し、ダムの砂堆やそれに起因する海岸浸蝕の進行など、現代の環境破壊を予言する先見的な講義が強く印象に残る。地誌では自然と人文の織りなす地域区分による中国大陸に興味と感銘を受けた。池ノ上の御自宅に先輩や級友とよく訪問したが、「小母さん」と呼んでおられた奥様が、いつもお茶と手焼せんべいを沢山出されるので空腹が満たされた。先生が亡くなられてから気付いた

ことであるが、鶯谷の多田家墓地のある世尊寺の近くには、手焼きせんべい屋が数軒並んでおり、生前にそこの味を好まれたのではないだろうか。

東大で多田先生の研究室と同室だった新進の小堀巖先生の人文地理・交通地理の講義は、いつも多数の文献を列挙され、その読破力に感心させられた。

東京学芸大学の小栗宏先生の外国地誌は原書講読だったので苦勞した。歯切れのよかった辻本芳郎先生の米国地誌は詳細で興味深く、資源地理では在来伝統工業の研究成果が教材であった。いつもにこやかな山鹿誠次先生からは、1日を費やして東京高師付属高校と女高師付属中学校の授業参観をさせていただき、張り詰めた教室の雰囲気を受けて、教師になるのは大変なことだと緊張させられた思いが蘇る。

東京文理科大学からの兼任講師が最も多く、日本地誌の青野寿郎先生、地球・海洋の三野与吉先生、地理通論の浅香幸雄先生の三方は、昭和22年度で退任された。しかし私は浅香幸雄先生の山岳登拝集落の研究に啓発されて、末永く指導を仰ぐことになる。

河田喜代助先生の地質学では、秩父長瀨での自然科学博物館見学と地質調査実習や、栃木県葛生の石灰岩地帯の巡検で、初めて見るフズリナ・海百合などの化石が2.5億年前の古生代二疊紀のものだと教わり、日本列島悠久の地史に感動した(1949年)。温厚誠実な先生が1952年に明神礁の海底火山爆発で、調査中に犠牲となられたときは大きなショックを受けた。関口武先生の気候学・実習では推計学による確率の計算で、統計数値の信頼度に関心をもつようになり、日本列島の詳細なケッペンの気候区を先

生が最初に試みられたことも印象深い。

谷津榮寿先生は寸暇を惜しみ、渋谷から駒沢間の玉電車内で飯盒の弁当をよく食べておられるとの評判であった。地形学・実習などで現地調査も熱心に指導された。しかし椎名町で青酸カリによる集団毒殺の帝銀事件(1948年1月)直後は、課題の地下水調査で井戸水を採取する家毎に警戒される羽目になった。二子玉川から多摩川河床に下ると、礫が雑然と散乱しているように見えるが、総て礫は河流に最も抵抗が少ないように、礫の長軸と流れの方向は並行しているというご指摘に、自然現象の原理が興味深かった。

3学年になった昭和24年度からは新制大学へ体制づくりのため、専任は主任教授に井上修次先生、助教授は井関弘太郎・谷津榮寿・入江敏夫先生、兼任講師は前期の諸先生に加えて、第1回地歴科卒業の赤峯倫介先生が農林省から兼任で迎えられた。先生は熊本県阿蘇南郷谷ご出身の酒豪で、農林省職員組合委員長を経歴した猛者であった。第1回生は全員が文部省の中等学校地歴科教員免許取得のため、必死に勉強し全員合格したことや、初めて先生宅を訪ねたとき、床が抜けるのではないかと思うほどの書棚に驚かされた。講義の帰りに幾度か誘われて、三軒茶屋の櫻井正信先輩が経営する鶏正にお寄りした。部屋にあがって政治や研究談義をされるうちに、当時は貴重だった鶏鍋をいつもご馳走になった。

井関弘太郎先生は日本地誌・実習・演習などの担当科目ばかりでなく、先輩・専任ならではの万事相談相手となって下さった。昭和24年11月26・27日に開催した地歴科創立20周年の地理科記念行事の推進者でもあった。この年の

夏休みに1週間、私は静岡市郊外の登呂遺跡調査の補助員として、新婚早々の先生に随同行したことがある。前年に多田先生の野外巡検で登呂遺跡は見学していたが、考古学の独壇場に地理学からどんなアプローチが可能なのか私には見当もつかなかった。しかし炎天下にボーリング器材を持ち運び、そのデータで先生が遺跡一帯の地層断面図を作成し、沖積層の堆積過程と弥生時代の住居址や水田跡を被う礫層の状態などから、登呂集落が洪水で潰滅したことを指摘され、考古学関係者の注目をひいた。井関先生はその後名古屋大学に移られたが、第四紀地形学と考古学をドッキングした独自の研究分野で多大な業績を残された。

#### 《野外巡検の思い出》

##### (1) 多田文男先生の久能山・御前崎巡検

昭和23年11月に先生指導による1泊2日の巡検は、2学年8名と法政から市之瀬由自君(現法政大学名誉教授)が参加。午前7時東京駅発の普通列車で清水に着いたのは12時に近かった。バスで久能山麓に下車し、急斜面を利用した石垣イチゴ栽培の知恵と景観に感動した。ミニグランドキャニオンと呼んだ急崖の峡谷に、貝化石を発見しながら久能山頂に到達し、快晴の日本平から眺める三保松原の砂嘴と富士山は絶景であった。再び山を下って登呂遺跡を巡り、宿泊は藤枝の夏目君出生の宗乗寺であったが、当時はまだ食糧難で各自米を持参した。しかしそれ以上のご馳走に満腹し、明日のスタミナがついた。

翌朝は5時起床、6時30分藤枝発の静鉄藤相線は、初めて見る超狭軌(軽便鉄道)のミニSL列車で、約2時間かけて終点の御前崎に到着。太平洋を望む海岸段丘上の燈台から波打際に下

り、海岸地形の解説に傾聴した。強風による砂粒の磨耗で生じるという三稜石を探すことになったが、先生も私たちも確かなものは発見できなかった。晩秋の好天気恵まれた巡検で、地理の面白さや歓談を楽しみながら東京に帰着したのは夜の9時頃だった。

##### (2) 有志による秘境五家荘の巡検

昭和23年の前期、井上修次先生が隠田集落の五家荘について、明治時代に探訪した学者から直接聞いた話として、九州山地の平家落人伝承地だが、水田はないため米は最高の貴重品で、臨終の時は米の入った竹筒を振って音を聞かせたことや、貴人が村に泊まると生娘の人身御供があつて、その夜は家の周囲を若者が見張る。後者は体験したらしいと、普段はすまし顔の先生だがこの時は楽しげに話された。

そんな不思議な所があるなら行ってみようではないかと提案したところ、真っ先に賛成したのが松田君である。しかしほかの級友は九州は遠い、ましてや不便な山中ではということで、結局下級生に呼びかけて大分県宇佐の高持君と兵庫県佐用の三好君を同伴し8月に実行した。1週間分の食糧や寝具などでリュックの重さは20キロを越えた。当時の五家荘は仁田尾・椎原・葉木・樺木・久連子の五か村からなり、域外からの車道はなく、その共同役場を八代郡柿迫村役場が兼帯。そこが鹿児島本線有佐駅から1日二本くらいの定期バス終点で2時間余りを要した。村長さんから宿所などを紹介していただき、5万分ノ1地形図を頼りに山岳重量の五家荘に分け入った。見るも聞くも初めての別世界で、米は戦時中の配給制度になって初めて食べるようになったが、五家荘内に配給所はなく、泊りがけで柿迫村に月1度買いに行くという。

しかし当時も雑穀が主食で、急斜面の焼畑を素足で働いていた。泊まると必ず出される竹ノ子入りの味噌汁と梅干は、歓待の証ですと山中で出会った一人の行商人に教えられた。最奥の樫木村はまだ電燈がなく、夜はローソクとランプ、夜道は松明を使っており、厠ではペーパー使用以前の古態が残っていた。

久連子村を最後に帰途についたが、当日中に帰宅は不可能となり人吉で旅館に泊った。しかし各自の所持金は底をつき、4名の持ち金を総てプールして何とか宿代を払い帰宅した。巡検の結果は4名でまとめ、当時卒業生と在生学生を中心に活動していた駒澤地理学会の11月総会で発表した。

### (3) 北海道自主巡検

昭和24年9月、2週間に及ぶ北海道巡検を卒業記念と位置づけ、当初は井関先生の引率で地理科正規の巡検を意図し、押しの強いクラス委員の菅野君が、赤猿のニックネームをもつ気の強い九州天草ご出身の上野教務課長と専ら交渉を重ねた。しかし、当時の地理科巡検は日帰りか一泊だったので、結局は長期の巡検は例がないということで許可されず、強行者6名による自主巡検となった。

事前に多田・井関両先生から巡検コースや見所などのアドバイスを受け、宗門寺院や先輩への宿泊依頼など、ミーティングを重ねて次のコースを実施した。

9月2日21時上野発⇒3日22時青森着(駅泊)  
⇒4日青函連絡船(羊蹄丸)～5日函館⇒倶知安  
⇒岩内(佐々木善民先輩宅、5・6日泊)  
⇒7日小樽⇒札幌(中央寺泊)  
⇒8日旭川(大休寺泊)  
⇒9日美瑛(全休寺泊)⇒富良野⇒狩勝峠⇒帯

広(10・11日 寺泊)

⇒12日広尾→庶野→幌泉→様似⇒静内(禅祥寺泊)

⇒13日苫小牧⇒登別温泉⇒室蘭(安楽寺泊)⇒  
14日伊達紋別←→昭和新山 長万部⇒(夜行列車)

⇒15日函館⇄五稜郭(羊蹄丸)～青森=(夜行列車)⇒17日上野着。

この巡検の思い出は尽きない。上野から2泊を要して辿りついた北海道最初の宿泊地岩内の佐々木先輩宅では、御馳走攻めであったが、積丹半島雷電岬で佐々木さんが素潜りで採った生ウニの味は忘れられない。小樽では先住民の古代文字が記された手宮洞窟を見て、札幌では北大の北方文化研究室や植物園を訪ね、夜は狸小路まで徘徊したが、中央寺の御住職から激励の金一封をいただき恐縮した。

旭川郊外のアイヌ村は観光化以前の姿であり、各自アイヌ装束を借りて記念写真に収めた。美瑛では大雪山を遠望する盆地景観が雄大であった。狩勝峠のスイッチバックからトンネルを抜けると眼下に広がる十勝平野の絶景に思わず歓声。二泊した帯広では十勝農事試験場で教わった土壌の性質や、硬い皮のナタ割りカボチャとビートの甘味が珍しかった。翌日は佐古の酪農家を訪問し稲作農家との違いを学習した。

帯広を8時に出発し正午に広尾からバスを2度乗り継ぎ、襟裳岬を横断して様似までは悪路の連続で6時間を要し、静内の禅祥寺に着いたのは20時頃だった。翌日も早朝出発のため歓待の夕食後すぐに就寝したが、御住職のお嬢さんが、樋口さんの角帽姿に憧れ、どうしても被ってみたいとねだられ、遅くまで付き合ったらしい。

苦小牧を経て登別温泉も思い出がある。地獄谷を訪れたが暑くて汗ばんだので温泉に入ることにした。しかし混浴ということがわかり、樋口さんもおられるので躊躇し、結局入湯は断念したが、先納・菅野両君は大変残念がっていた。この日も室蘭の安楽寺に着いたのは20時過ぎ。

昭和新山の登頂はスリルがあった。何しろ昭和20年9月までの2年足らずの間に、400余mの火山体を形成したばかりで、平地が火山となった為に、斜めに生えたような黒焦げの森の異様さや、立っていると靴底が焼けて熱くなり、噴気音が今にも噴火しそうな感じで早々に下山した。麓でこの火山活動を丹念にスケッチした地元の郵便局長・三松正夫氏を訪ね、いわゆる三松ダイヤグラムで真迫感のある説明を受けた。

食糧難と交通条件も不備で財布も軽かった学生時代に、2週間に及ぶ北海道巡検が実現したのは、先輩や多くの宗門寺院が僅少な寸志のみで心よく宿泊と接待をして下さったお蔭である。菅野君の記憶では、どこかの宿泊寺院で一同に、当時では貴重で高価だった小豆を沢山いただいて東京まで持ち帰るはずであったが、途中で換金し旅費の足しにしたこともあったらしく、駒大地理科ならではの巡検であった。

#### 《地歴科創立20周年記念の地理科行事》

1929年（昭和4）に地歴科第1回卒業生が巣立って以来、20年目の1949年11月26・27日に創立20周年記念を地歴科合同で開催した。私たちは第20回卒業予定の最上級生であったので、地理科行事の思い出を記しておきたい。

当時の地理科は1～3年全員で40名程度であったから各人分担し、先輩の井関・赤峯先生を中心に多くの先輩が応援して下さいました。準備は5月から始めたが11月に入ると連日だった。宗

務庁に出向いて寄金を仰いだこともある。都内を中心に200校の中・高校長宛に、生徒の社会科作品コンクールへの出品依頼状を送った。会場は大学新館の最上階を使用し、2日前から展示陳列に取りかかった。

#### 主な記念行事

##### (1) 地歴合同の記念講演

初日に行われ、石田龍次郎先生の「人文地理学の道」。谷津榮壽先生の「地下水について」。丸山二郎先生の「関東の御恩」を傾聴した。

##### (2) 学科紹介の展示品

長い廊下を利用して自然地理分野の貴重な写真や1000余種の化石・鉱物標本なども圧巻であった。それらの説明役は木島・栗山君。谷津先生直々指導の地下水分析は伊藤君と2年生の有志が担当。土壌図の説明は菅野君、日本の人口問題を統計地図で解説するのは松田君、日本の集落地理は私。地図と景観写真によるデンマークの酪農を夏目君、ソ連の農業は先納君。樋口喜美江さんはイギリスの80万分ノ1土地利用図の説明を担当。この地図はGHQ（連合軍総司令部）天然資源局に借用のため、児玉学藍・井関先生に栗山君と私が随行して出頭し、帰りは米軍のジープで市中を突っ走り大学まで送ってくれた。

##### (3) 中・高校生の社会科作品コンクール

主として先輩の勤める学校から50余点の応募があり、その選考は井関・谷津・赤峯先生を中心に、私たちも意見を述べた。その結果、入賞作品の指導者は総て先輩たちである。表賞式は教室会場で下記の各代表生徒に赤峯倫介先生から賞状・賞品が手渡された。

1等 立教大学附属高校生の「東京の化石」（大澤詮先生指導）

2等 小石川工業高校生の「50万分ノ1日本立体地図模型」(榮山一美先生指導)

2等 相洋高校生の「20万分ノ1伊豆半島立体地図模型」(小松由次先生指導)

3等 日大第三中学校生の「八王子付近の地下水調査」(中島義一先生指導)

3等 昭和女子大付属中学校生の「豊成殿模型」(思田肇先生指導)

3等 立教大学付属高校生の「東京付近の古墳調査」(大澤詮先生指導)

20周年記念行事は、地理科も歴史科も大盛会のうちに終了したので、2日目の夕刻から先生方や先輩・在学生の大懇親会を開いた。当時はまだ酒・ビールは稀少・高価で、工業用のメチルアルコールを飲んで失明したり死亡する新聞記事が時々出るような時代であったが、誰かが安い密造の濁酒(マッカリ)を多量に持ち込んだので大いに酩酊した。

《あとがき》

1951年(昭和26)のサンフランシスコ講和条約前で、政治も経済もままならないインフレと食糧難に喘いだ学生時代だった。ハガキ料金は昭和23~24年の間に50銭から2円と4倍になったり、図書館(耕雲館)地下に食堂がオープン(昭和24)しても、主食は配給制のため1食1枚の外食券を出さないと、お金だけでは食事にありつけなかった。それでもこの原稿を書きながら思うことは、学生数が少なかったこともあって、専任・兼任の区別なく教師と学生に信頼関係があつて暖かかった。10余名の学友はお互いの性格を熟知しており、和気あいあいであった。野外巡検や20周年記念行事などを振り返ると、チャレンジ精神も旺盛だった。

駒大のスポーツも当時は相撲部が強く、東都

大学野球は1948年に三部の秋季リーグ戦に大正大と1点差で優勝、二部との入替戦は東洋大と1点差勝、そして翌年春に二部で優勝し、一部との入替戦は國學院大と何れも延長戦で1勝1敗のあと、3戦目も延長逆転の1点差で勝利した時の全学的な応援は凄かった。駒大全体が元気づいた。

2001年5月27日に私たち第20回地理科生全員10名が51年目の同窓会を開いた。駒大正門での記念写真と、卒業時の写真を対比すると感慨無量であるが、お互いに駒大地理科の教育を受けて精一杯生きてきた顔と顔である。卒業した10名のうち残念にも岩崎君は他界したが、2学年で中退の前田君が駆けつけてくれた。集まると学生時代や卒業後の話題で盛り上がる。



紅一点の樋口さんは建設省エリートの方呂氏と結婚し、二人の英才男子を育て幸せな家庭を築いてこられた。中・高教員を経験したのは伊藤・菅野・木島・先納・夏目君そして私もそうである。伊藤君は農業の傍に馬具のコレクション・研究者として著名となり、日本唯一の馬の博物館（横浜市）で講演したり民俗学などから注目されている。

菅野君は現在も岩手県警察本部の県少年補導員や、県公安委員会の県青少年指導員を依頼され貢献している。

木島君は世界仏教徒交流会を主催する駒澤大学名誉教授光地英学先生が住職の仏陀寺（豊島区池袋）で副住職として精進している。前田君は永年にわたり法務大臣が委嘱する鳥取県保護司として貢献した。先納君が住職の法泉寺は、戦国大名の北條早雲が若いとき学問を修めた古刹とされ、その顕揚に努めると共に井原市の文化財専門委員として尽力した。夏目君は駒大系列陰の功労者で、実弟は現在、駒澤女子大学学長の伊藤文雄氏である。

栗山君は建設省国土地理院で初めて 5000 分の 1 国土基本図を実現させ、後にその担当課長にもなり、駒大歴史学科の兼任講師として測量

実習を指導した。現在も夏目君と共に同窓会の世話役を引き受けてくれている。

松田君は異彩ぶりを発揮して昭和医科大学に進学。学位をとり現在も新横浜病院長であり、2003 年の日本総合検診医学会大会では大会長をつとめるなど活躍している。同級会にも必ず駆けつけてくれるので、ドクター付の安心した宿泊旅行で旧交を暖めている。

私は 1978 年～98 年まで懐かしい地理学科に奉職し学位までいただいた。その因縁もあってか 75 周年記念誌「思い出の手記」の寄稿を依頼された。僅か 10 名の卒業生だから、各人が思い出の短文を記し、それをまとめる形にしてはどうかと同級会の席で提案したが、結局は私が書く羽目になった。僅かに残っていた学生時代の記録メモや写真などを眺めながら、紙面だけは 2～3 人分使わせていただいたが、とても各人の思いを表現することは不可能で、私の主観的な思い出になったことをお許しいただきたい。そして母校の発展を願うと共に、駒澤大学・恩師・先輩・後輩・級友に育まれた知と心と懐かしい思い出を生涯の宝として余生を送りたいと思うこの頃である。

## 50 年前の追憶

### 志賀 利隆（1955 年卒）

俗人ながら学風、低廉な学費、学寮入寮可にひかれ 2 ヶ年勤めた小学校教員を辞め 8 千余円の入学時経費を納め、米の統制が残る時世で移

動証明なるものを取り、国鉄のチッキという配達で蒲団袋と行季を学寮である竹友舎に送り大学生活を始めたのは昭和 26 年であった。竹友舎

における早朝の振鈴による起床と底冷えのする旧館屋上での歌唱練習，朝課と称する法要とその後の一堂の朝食，同室の団欒など懐かしい思い出である。

大学も 24 年に新制大学制がしかれたことにより旧制大学の学部や専門部の 3 年生が居り，新制大学も 3 年生以下とが混在していたが，合わせても 400 に至らない規模の学生数でみな知己の間柄であった。

大学の経営は苦しく戦時中に空襲を避けるために施した校舎の迷彩は残り蒼然としていたが，27 年に渋谷に商経学部 2 部ができ夜間に駒沢大学商経学部のネオンが渋谷の丘に異彩を放っていた。

1 年次から応援団に所属していた関係で体育系のサークルの活動は熟知していた。相撲，スキー，空手部等活発であったが，全学挙げて刮目したのは野球部であった。

しかし 1 部昇格の日も浅く B クラスの常連校で最下位も珍しくもなく入替戦で 2 部 1 位校の青学大や芝浦工大の挑戦を受け幾度となく心胆を寒からしめられたものだが 1 部校の地位は死守した。

そのような中で 28 年に A クラスに収まったことを機に「島育ち」や「島のブルース」等で知られ，作詞協会長を務められた先輩の吉川静夫氏に依頼し，青春花と咲き競う，の「燃えよ闘魂」の新応援歌を作成した。

また同時に学内募金により応援団所属のブラズバンドを立ち上げたが，その吹奏楽部が今や全日本の雄として金賞の栄冠に輝く存在感のある部に成長したことは同慶の至りである。

黒地に校章を白ぬきにした応援団のシンボルである団旗もこの年度に作成した。この団旗は

大学紛争のさなか攻撃の矢面にされたが死守され越ヶ谷市在住の後輩の小島氏が保管している。

斯くの如く実績を高めたときの応援団長は昭和 28 年度地理卒，故風間英進氏（新潟，糸魚川高校長現職死去）であり，その後を継いだのも私と同期の昭和 29 年度地理卒，宮本亨一氏（宮城・古川商高）が団長で私は副団長として伝統を守り地理学専攻在りきを示した。さて，私が唯一，地理学徒であったことの証として言えるのは卒論である。朝鮮動乱で産業界は息を吹き返し昭和 27 年には GNP は戦前の水準に復帰した。特に工鉱業の発展は世界に類を見ない高度な成長が始まったが今日的なフレーズである自然保護，環境破壊も無く公害問題も軽視されていた時が私の卒業年度であった。

私の故郷は，当時茨城県多賀郡南中郷村と言った。郡内一の米の生産地で常磐炭鉱の南端に位置し 23 年頃より水田の沈下が起き鉱害問題が始まった。郷里における身近な問題としての着眼から当初の卒論論題は「常磐炭鉱周辺農村に於ける鉱害について」とする頭でっかちのテーマであった。

5 月 29 日，井上修次教授に着眼点を説明し先生から，ありのまま，思ったままにまとめるようにと指導を受けた。

7 月 1 日，「南中郷村における炭鉱発達による農業への影響」と論題変更の旨を教務課へ申請，井上教授にそのことを報告と草稿に記してあった。

拙論は炭坑の採炭技術の地表災害の防除の充填方式の後進性と地表においては小土地所有者の零細経営による農業との連関接触面において農業サイドの全く一方的受身において生起した事象であったことをまとめたものであった。

この卒論は奇しくも駒沢大学地理学専攻の代表として全国地理学卒論発表会に加わり、その参加賞として日本地理教育学会から“THE

NEW WORLD PROBLEMS IN POLITICAL GEOGRAPHY”の著書を受けた。それには昭和30年3月20日と記してある。

## 学会の思い出

### 善浪 昭道（1957年卒）

昭和30年夏、大和ゼミ（大和英成助教授物故）の東北巡検に参加しました。

はるか48年も前のことで、記憶が定かではない部分もありますが、総じて忘れられない若き日の貴重な学習の旅でした。

甘藍栽培（岩手県葛巻市）の実態見学をメインに、富士鉄釜石製鉄所（現新日鉄釜石）とリアス式海岸（浄土ヶ浜一帯）そして、やがて干拓事業が始まろうとしていた八郎潟等の見学でした。

駅前旅館（鮎川か？）に一泊。

幹事が正直に学生のふところを打明け、1泊2食350円を更に安くまけてもらいました。

やさしい宿のご主人の粋な計らいで、なんとお酒つきでした。

「私達は駒大地理学科の巡検で八郎潟の見学にきました…」と話しても、駒大イコール仏教科と言う受けとめ方で、「そうですか、お坊さんは勉強の範囲が広いんですね。分かりました。とにかく今夜は大サービスしますよ」と言ったあんばいで思いがけず楽しくなごやかな夜になりました。

お酒はたっぷり、ご飯はお鉢のお代わり自由、何もかも最高のおもてなしでした。

一同顔を見合わせ、改めて、伝統ある駒大に学んだ恩恵に感謝しきり。

学生を大切にしてくれた古き良き時代でした。

昭和28年入学の地理学専攻は17名で全員男性、そして全員めでたく卒業しました。

卒業後は大方教職へと全国に散って行きました。

当時の地理学科は少人数で、とても温かい雰囲気でした。登校時は必ず研究室へ顔を出すルールになっていました。1、2年の頃は研究室の片隅に息をひそめて先輩達の動静を伺うのが常で、その中からいろいろ学びました。先輩たちの話題は、卒論が進まない焦りを漏らす人、資料さがしに苦勞している人、実家が苦しく仕送りが乏しいとぼやく人、体調が思わしくないが病院にかかれないで悩む人等々さりげない会話の中に学生の悲哀が滲んで見えました。

研究室は、若人の幅広い情報交換の場、雑学等々の行き交うサロンのような場でもありました。

気候学の関口武先生とは、1対1で1年間受講しました。休みたくも、先生に無駄足をさせては失礼千万と思い懸命に受講しました。著名な先生を独占できた、今にして思えば、ぜいたくな話で、その後折々の語り草になっています。

これがご縁で、先生亡き今もご家族とのお付き合いが続いています。思えば感慨無量です。同期の W さんは、極寒のシベリアで辛酸をなめた元将校でした。世帯もちで、奥さんが区役所に勤め一家の柱。W さんは家事と子供の保育園への送迎が役割りの由で、授業が終わるや足早に帰っていきました。当時は珍しいケースで、何ともほほえましくみえたものです。

F さんは、サッカー部に所属し、余暇はグラウンドでボール蹴り三昧でした。北海道出身の苦勞人で成績抜群。今では地理学科 OB の教授となり後輩の指導に当たられています。

卒業後も私的にご指導いただいています。W さんも同期とは言え年齢的には大先輩で、社会経験等も豊富でした。おのずと言動には重みがあり、向学心に燃えていました。

卒業時は運が悪く、かの有名な、なべ底景気のまっただ中でとにかく不況でした。

お蔭で昨今同様、就職には大変苦勞しました。因みに、私は 2 年の就職浪人を経て、社会福祉の道に進み定年まで神奈川県行政の一端を担いました。

母校の発展には只々驚くばかりで、いつも頼もしく、心強く見守っています。

とくに陸上部の活躍には目を見はります。

大人気の箱根駅伝は、全国の新春の茶の間に興奮と感動を届けてくれます。その中心は吾が駒大。改めて関係スタッフに脱帽です。OB の 1 人として胸を張り、誇らしく身に余る元気をいただいています。

また、神宮球場へも年に何回か足を運び野球部の一投一打に拍手を送り、若人の滲刺としたプレーに感激し、それを活力の資としています。

母校の限りない発展と、輝かしい 75 周年の歴史ある地理学科の益々の充実、強化を心より祈念申し上げます。

## 思い出の記

### 稲葉 良彦（1958 年卒）

昭和 29 年 4 月入学と同時に竹友舎へ入寮。寮生活に多少馴れた頃、地理専攻の先輩桑原明氏に伴なわれ、故綿貫勇彦先生の追善法要の手伝いに出向。多田先生、大和先生、同窓の方が数名お集まりでした。先輩方の駒大によせるお気持ちを感じた日でした。

地理学科については先輩からの助言もあり初年度でしたが研究室・学生の控室などを覗いたことがあります。当時の研究室や教室は、昭和

初期建造の 1 号館の一劃でした。野外巡検は必修科目でしたが内容については学生の希望も採択されていたようです。初めて参加した巡検は入江先生の指導で、山梨県勝沼、葡萄栽培の農家で聴取りをさせてもらい、当日は甲府市郊外の向昌院同期黒川和真兄（故人）の実家の本堂に拝宿。翌日は静岡県佐久間ダム見学、2 泊目は豊川稲荷・妙巖寺宿坊に拝宿、翌日解散でした。

大和先生の巡検も幾度か参加。北上山地横断、沼宮内で夏キャベツの栽培、宿では先生が私達のために稗飯を特注され一同試食、軽米では稗栽培の特別講話、地元の同窓の方の寺に拝宿。国鉄定期バスで久慈經由青森までの2泊3日でした。

昭和33年夏、札幌、旭川、帯広、中標津、釧路を経由する巡検にも参加をさせていただきました。帯広は2泊、夜遅くまで大和先生の指導がありました。

昭和30年頃の教室は照明も暗く、冬は寒かったのが忘れられません。大和先生は千葉県の干拓、新潟県亀田・白根・西蒲原巻地区など低湿地農業の講義をされました。板書が多く、時間一杯お使いになりました。入江先生は多少遅れ気味に教室にお入りの日もありましたが、独特の早口で講義をお進めでした。植民地、国際石油資本などを話されたと思います。当時は、多田先生はじめ谷津、井口、関口、小川、桜井、今朝洞、渡辺各先生がお揃いであり、学生は全体で百名程度の頃でしたから恵まれていたのだと思います。

大和先生は、昭和48年5月駒澤大学教授を現職で逝去されました。昭和25年、講師としてお出でになってから永年駒澤大学地理学科のためにお尽くしになりました。日本地理学会1961年度総会春期大会が駒澤大学を会場に開催され時も準備から開催まで諸般にわたりご尽力をさ

れたのだと思います。この時には、地理学科同窓の方も多数参加をされ懇親会が催されました。

昭和43年の夏だと思います。「巡検で新潟に行く、宿に来ないか」と電話を頂き、寺泊の宿舎にお訪ねしたことがあります。白根市、巻町にお出でのようなでした。多年、調査・研究を積まれた土地を巡検先にご自身が選ばれたのかも知れません。学生は50名程、予想をはるかに越える大所帯でした。帰郷以来の報告を申し上げお暇をしましたが、此時が最後になりました。先生は昭和33年助教授ご就任、研究室の整備を図られ特に図書に重点をおかれしました。

ご指導をいただいた多田先生も既にご逝去。謹んで御冥福をお祈り致します。平成16年、地理学科は75周年を迎えます。益々のご発展幸お祈り致します。



(写真) 駒澤大学地理学科同窓会

(日本地理学会1961年度春期大会時)

## 学 究 の 頃

桜井 研三 (1959 年卒)

思えば、前半世紀近く (昭和 34 年春卒) 35 年間、都内の私立女学校の教員として過ごさせて頂きました。勇退して 7 年目、「中野シルバー人材センター」の仕事をしたり、当センター文化部写真サークルの幹事としてがんばって、撮影行に参加したり、地域 (中野区中心) の同好会「中野ナチュラルリストの会」の仲間と諸地方の自然 (主に四季の花々) や歴史 (主に寺社) を探索する日々です。先日、家のリフォームの際、古いアルバムを整理して当時を思い出している次第です。

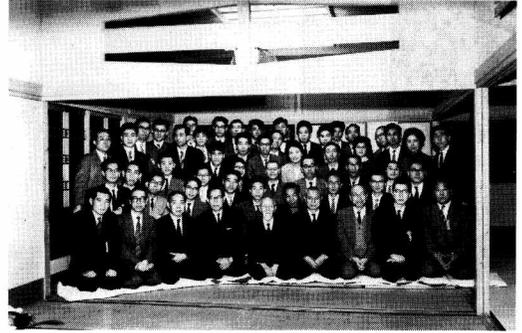
北海道の寒冷地農業 (大和先生)、遠洲灘・天竜川の地形・フォッサマグナ (井口先生)、信濃川の河岸段丘と地汜り (谷津・井口先生)、等の巡検の写真が残っています。

写真 A は三軒茶屋での地理科同窓会で総長を初め、多田・大和等々の先生方が最前列でした。写真 B は 1958・2・1 新宿「富士寿司」にて在校生が 4 年生を送別する会合でした。大和・赤嶺・渡辺などの諸先生と先輩でした。写真 C は冬の校門の前で、親友の米野君と一緒にした (彼は現在、仙台の幼稚園長)。

その他、入江・稲葉助手先生等にお世話になりました。亦、桜井正信氏の業績にも感心しています。

発刊の頃は「古希」を迎えます。地理を専攻し、社会科の教員としてすごした経験が現在の趣味の世界 (余世?) にもつながります。

同窓会の皆々様、目にふれることがありましたら、ご一報お待ちしております。



(写真 A)



(写真 B)



(写真 C)

## 75周年を迎えるに当って

溝上 今朝人（1959年卒）

地理学科を卒業し、早いもので45年の月日が流れ過齡と共に母校とも縁遠くなりつつある現在、同窓会だよりで地理学科が平成16年に75周年を迎えることを知り、母校が栄え、益々発展することにこのうえない喜びを感じています。

お陰様で高校時代からの夢がかなって教職の道に進むことが出来ました。親から預かった大事なお子さんと共に学び、子どものために人生の総べてを注ぐことが出来たことを大変、光栄に思っています。

退職後は、お世話になった地域社会への恩返しに5年間、県・市で青少年関係の仕事をさせて頂きました。現在は旅をしたり、趣味で始めた切り絵に夢中になって、最近は日本きり絵美術展(東京都美術館)にも出品しています。

入学したころの深沢は、まだ野菜畑も見られました。キャンパスは大学本部(大講堂・座禅堂含む)、本館(口の字型・地下1階・地上3階)、西洋風図書館、その付属の建物、グラウンド、また近くに付属高校、竹友寮がありました。歴史を刻んだヒマラヤスィーダや桜の古木などの緑に囲まれ落ち着いた環境でした。渋谷駅近くの高台には商経学部の夜間部校舎もありました。当時、都内の大学には地理学科が少なく私の記憶では、夜間の学科を含む5大学位だったように思います。

駒澤地理の教授陣は、日本地理学会で活躍されていた年輩の先生方や若手地理学者の先生で編成されすばらしいものでした。講義やゼミも

少人数のため家族的な雰囲気での親切な指導で、それに答えるかのように学生も真剣に取り組んでいました。

駒澤の地理学科は高等師範部の一学科として発足したもので中等教員を育成する教育機関として、都内では東京高師(現筑波大)、女子高師(現お茶の水女子大)を除いては唯一のもので、創立30年で約700名の養成地理学者が社会に出て活躍しているとのことを耳にし、誇りと意を強くした次第です。私の在学中も農林省、国土地理院、大学など巾広い分野で先輩が活躍していました。

このころ部屋代が一畳1,000円位で高知県の矢野君と上馬で自炊をしていました。大学に近かったこともあり、近県からの自宅通学生の空き時間等の溜り場になっていました。またダンス好きの者がいて時には、部屋がホールに変わることもありました。今となっては、楽しい思い出に尽きます。

地理学科の仲間の多くは教職希望で教職の道が難しいなか通信教育で小学校の免許状を取るなど努力に努力を重ね希望をかなえた者もいました。また仲間のなかには管理職についた者も少なくありません。私もそのなかの1人です。

他の道を選択した仲間は、持てる力を存分發揮して職場の中心として活躍し、現在も頑張っている者もいます。45年たった今も仲間の結束は固く各地で集まりを持っています。最近では岡山、松島、そして現在、計画中です。話の中

心は駒大当時の思い出話に花が咲きます。

そして仲間の笑顔には駒澤大学で培われたもの…。また戦後社会を強く逞しく生き抜いて来た自信が眩しい程に輝きあふれています。当時は地理学教室内に駒澤大学地理学会がおかれ、よく校内研究会が開かれていました。その学会の研究の一部として、多くの方々の協力を得ながら「駒澤地理」第1号を発行することが出来、

内容的にも充実していて中々、好評でした。

発行に至るまでには、先輩の大和教授の並々ならぬお力がありました。会の代表でもありましたので、その感動と喜びも大変、大きなものがあります。「駒澤地理」第1号は私の宝です。思い出しては、時折、目を通しています。

駒澤大学、地理学科の更なる発展をお祈りしています。

## 自転車操業の日々

佐藤 正（1961年卒）

親元を離れていったん就職した会社を去り、故郷の信州に帰って療養生活を終えた時には、すでに高校卒業から6年が経っていた。もはや、親の援助に頼る年齢ではなかった。

会社時代の知友を頼って上京して来た世田谷区は田園の風情を残し、駒澤大学は徒歩5分の位置にあった。

知友の親族の茶商を手伝いながら念願の教職を目指し、自活と進学を決意した。幸運にも多くの教職者を輩出している駒澤大学地歴学科が、私を拾い上げてくれた。

当時、日本育英会の奨学金は授業料とほぼ同額であったように思う。32年度入学生を示す32カ22642の奨学生番号が今でも頭をよぎる。学生課で受給した奨学金をその都度、会計課の窓口へ納入する変則的な分割納入にも大学は寛大であった。

およそ身なり風貌とも学生らしいものではなかったが、大学構内にいると不思議に会社時代

とは違った気持ちのゆとりを感じる事が出来た。

地理歴史学科は当時約40人ほどで、半分が地理専攻生であった。2号館の2階に地理学研究室が1部屋あり、教授との団欒の場にもなった。当時の卒業アルバムには、多田文男、大和英成、井口正男の三教授、小栗宏、渡辺一夫、桜井正信、関口武の四講師と稲葉良彦助手の写真が並んでいる。入江敏夫、谷津栄寿、今朝洞重美の諸先生の講義も受けた。

私は自活資金を得るため、文字どおりの自転車操業の日々で授業以外でのキャンパス生活の思い出には乏しい。

毎日自転車で世田谷区・目黒区などを駆け巡り、さまざまな社会勉強が出来た。世田谷公園は当時一面の草原で、建設労務者の飯場が建ち並び私の営業ポイントでもあった。その地で、モツ料理を振る舞ってくれたこともある養豚業者は、やがて東京を離れた。

近くに国土地理院があることも知り、教職についてからいろいろとお世話になった。営業で知り合った家から家庭教師を依頼されたことがあり、以後しだいに家庭教師の仕事が増え、それに切り替えていった。自転車で1日に2軒を回る多忙な時期もあった。家庭教師を多く経験したことが、空白の頭脳を刺激する絶好の機会となった。

1964年(昭39年)の東京オリンピック開催に向けて、東京がしだいに変わっていく様子を目の当たりすることが出来たのも、自転車操業の恩恵であり楽しみでもあった。

3年の7月に「北海道巡検」が実施された。札幌を起点に、富良野盆地、十勝平野、根釧土地、厚岸湾などの農業・水産業調査が主体で、大和教授、渡辺一夫講師が指導された。札幌集

合、美幌解散となると、その前後に各自多くの武勇伝を加えて、後期授業開始とともに始まるもう一つの巡検談義を盛り上げていた。こうして巡検はほぼ2週間に及んだ。

4年になると、教育実習や卒論の話題も多くなり、地理学研究室も賑わった。

学内の家族的な雰囲気のお陰で、浪人の私も見捨てられることなく卒業することができ、付属高校専任教諭の席を与えていただいた。

一大転機の駒大地理専攻への進学から、引き続き駒澤大学の付属高校で地理の教職に就き、以後も地理学研究室のお世話になりながら定年まで41年間を全うできた事は、駒澤大学はもちろぬ、地理学研究室の諸先生、学友、さらに学生時代から支えてくれた多くの方々のお陰であると感謝している。

## 心のふるさと我が母校

菊地 正義 (1961年卒)

昭和36年3月本校を卒業し、稲葉良彦氏に変わって副手となった。その春、駒大で最初の日本地理学会が開催された。

その時、多田文男主任教授、大和英成教授、井口正男助教授が中心になって大会準備が進められ、学会は盛大に行われ、成功することができた。懇親会は本校の図書館で行われた。

その席で、井関弘太郎氏(本学出身、当時名古屋大学教授)が駒澤大学が日本地理学会を開催する大学になったのかと涙声で挨拶された。宴会の後、矢沢大二氏(都立大学教授)が菊地

君ご苦労さん、今回はよい大会であったねと労をねぎらってくれた。

当時講師であった桜井正信先生が東京都の土

地利用図を作成する仕事をもってきて下さり、地理学専攻の学生をアルバイトに使用して完成させ納めた。当時のお金で40数万円の大金であった。

私が駒大からの月給は1万1千円、その金で食べていけるのかと大和先生がよく心配して下さいました。また「今日は原稿料が入ったので君の好きなものを御馳走する」といってくれて私はよく安田屋食堂で海老天丼を御馳走になった。あるときは渋谷のガード下の鳥市に行って美味しい焼き鳥を食べた。

また私が北海道の教員として赴任するとき、桜井先生と三軒茶屋の料亭で送別会をして下さいました。

浦河高校に勤務して2年目の時、大和先生は北海道巡検の際、真っ直ぐ浦河をたずねて下さり、私の下宿に2日泊った。そのとき浦高社会科の先生が集まり「ジンギスカン」を食べながら大いに語りあった。先生は「ジンギスカン」が気に入ったらしく大変喜んでおりました。次の日「えりも岬」を案内した。

また私は昭和47年、母校では2回目に開催された日本地理学会でつたない研究「北海道日高地方における軽種馬（競走馬）生産の現況」を

発表したのも私にとってお世話になった先生方や母校に対する御恩返しのつもりでした。その時も大和先生は大変喜んで下さいました。学会の前日、大学を訪ねると（大会準備中でした）、顔をみるなり、「総監督がきた」などと冗談をいわれ、長沼助教授に「彼は前の会場作りの経験者だから、仕上げは菊地君にみてもらえよ」などと笑顔で話していました。帰りには研究室に呼んでお土産まで下さいました。

また桜井先生には、朝日新聞社主催の「武蔵野の歴史の旅」、長瀬の岩石調査などにつれていってもらい、よく御馳走になった。

えりも岬は風が強く赤土が舞い上がり荒廃していた。多田先生は、緑化のため調査に来られた時、自宅を訪ねて下さり、のち「えりも岬周辺の自然地理学的研究」を送っていただきました。私は駒大のよきを謳歌し、母校を愛する精神を培ってくれたのは当時のよき先生方に恵まれたからだと思います。

駒大の思い出はつきない…。

母校の益々の御発展をお祈りしております。

## 懐古的な想起

石本 良男（1961年卒）

1957年春、オホーツク海沿岸の田舎から初めて東京へ出た。渋谷であったと思うが道を聞いた。「信号が青になったら歩道を行きなさい」

と警察官にいわれた。「信号が分からない田舎者に見えるんだ」。確かに田舎の町の中には信号機はまだなかった。無免許でアルバイトをして

いた。派出所へ配達に行っても「ご苦労さん」という時代だった。まあこれが東京暮らしのはじまりであった。

大学で学ぶ、地理学を学ぶ、この目的意識は今もかすかに残存する。竹友寮へ入れてもらった。古い木造の建物であったが、木目が浮き出るほど磨きぬかれた床や柱に禅僧の修行の軌跡を認めた。竹友寮では早朝から座禅・読経・掃除が日替わりに行われた。僧籍のない自分にはとまどいもあったが、朝食ではみそ汁をすすする音の出ないように食することを教えられたが、仏教を体験的に学ぶ機会を得た思いであった。

入学式後早朝から校庭で応援団の厳しい指揮の下で校歌、応援歌の練習が1週間ほど行われた。今も校歌が歌え、般若心経を唱えることができるのは寮生活の成果である。寮生活は僧籍の人たちや各地の出身者と交流ができたことやバス旅行や寮祭など南寮との2年間の生活は得るものが多くあった。

さて、初めての講義で「これが大学の授業か」と思ったことは、教養課程の授業で、板書に横文字が連なり、難解な内容が次々と出でくる。ノートを執るのが必死であった。不思議に思ったことは、どの講義にも座席に空きがあり、同科の学生の姿も少なかった。この傾向は他の学科にも共通していることがしだいに分かってきた。定期試験の際は普段見かけない面々が教室を埋めた。

自らも儉約生活であったが、敗戦後10余年のこの時期、学業と暮らしの両立が容易でない生活の実態であったと思う。卒業のとき自分が四年間に使った総額の半分で卒業した同科の友人の意欲的な暮しぶりを聞いて、生活費を稼ぎ出す必要を背負っていた人の多かったことを再認

識した。

地理学科に籍を置き、それなりに臨んだつもりであったが、地理学を体系的に理解することは容易ではなく、これが学問研究ということだと考えることで時が経った感である。講義は読図の基礎から自然地理、人文地理と広がりがあったが、各教授、講師の特色ある講義内容が想起される。「面白いものだ、楽しいものだ」と思ったのは巡検であった。初めての土地を訪ねることと地形や地質を学ぶことの興味が強かった。また現地の景観や風俗などに触れ、これに分析する方法等の講義を重ねることを通して地理学を学ぶことの意義を把握することができるようになった。

東京へ出るまで、生まれ育った土地の狭い認識しかもっていなかったが、入学後津軽海峡を渡って南北を往復することによって北海道とは異なる、煙突のない家屋や瓦屋根などの景観を見るとき、自然環境の違いとともに人文地理的な探求の視点を得ることができたが、巡検は景観を観察し包括的に分析する科学的な探求方法を養えたと考える。地理学的に事象をとらえること、探求することを学び取ることができたことが巡検の成果であったと思う。

地理学を学んだまとめともいえるのは卒業論文であったが、私は北海道の甜菜栽培に関して取り組んだ。資料や文献収集とこの内容の理解、把握や地域調査に多くの時間が必要であった。さらに論文をどのように構成、論述すべきか苦悩することが多かった。また扱った内容からも経済に関する知識の足りないことは致命的であった。しかし、指導講師の助言や指摘を受けて2年間の取り組みの形がなんとか整った。今も手元にある原稿を見るとなんとも稚拙な内容で

あるかと思うが、当時の自らの到達点であったことを認めるしかない。

卒論の規程に使用紙の枚数規程があり、論述観点を要約する力が足りず、規程を超え担当教授に迷惑をかけてしまった。

卒業後、幸い教職に就くことができ、社会科全般の科目を担当することが求められ、このため歴史分野、政治や経済分野、また倫理や宗教分野などの勉強のし直しが、大学で学んだ地理

学の成果を結実させるものとなったと思っている。

記念誌の発行のために私に課せられた課題に応えるものになったかどうか、懐かしさを想起する機会を与えていただいたことに感謝したい。

学科設置 75 周年、これまでの蓄積に尽力された関係者の方々に感謝申し上げます、あらたな飛躍を期待したい。

## もう 40 年も昔のことですが、 懐かしい思い出が次々と湧いてきます

楠本 勝（1965 年卒）

地理学科創立 75 周年おめでとうございます。私の在学時は、地理歴史学科地理学専攻でした。他の多くの大学が地理学科と名乗っていたのに、駒大は地理学専攻、より大学らしい感じがしていました。ちょうど私達が入学してまもなく「日本地理学会」が駒大で開催され、先生方の研究成果の発表や先輩諸氏が一生懸命活躍される姿を拝見し、すばらしい大学だ、頑張ってみようという気持ちになりました。

入学時、主に私達を担当して下さったのは、大和英成教授でした。いつも優しく、学生 1 人 1 人に対して本当によく面倒をみて下さいました。大和先生のお陰で、いつも研究室（当時 1 部屋しかありませんでした）に遠慮なく出入りができたのです。今思えば、うるさい連中に占領され、ずいぶん迷惑だったのではないかと反省しております。しかし、このことが、先生

方や、先輩方から地理に関する諸々のことがらをたくさん吸収させて頂くことになり、しかも、私達 40 年卒業「42」名（他にいつも一緒だった歴史専攻の人もいました）が、卒業後も仲良くしている原動力だったと思います。感謝でいっぱいです。

2 年次からは、自然地理学の井口正男教授もお世話下さいました。こつこつと研究をなさる先生で、常に的確なアドバイスを与えて下さいました。このころから先輩諸氏の計画された巡検に参加しました。桑畑の広がる相模原台地、石岡市の農村地帯、武蔵野台地、多摩丘陵などでした。各農家にお伺いする質問の仕方も次第に慣れてきました。教師になってから、何回か巡検を行いました。このことが基礎になっていたことはいまでもありません。

3 年次最大の思い出は北海道巡検です。42 名

全員が参加しました。当時、航空機は「高嶺の花」。上野発の急行列車で青森に行き、連絡船で函館へと行った具合です。引率された大和教授、2年先輩の伊藤喜代子助手はさぞ大変だったと推測いたします。札幌、増毛、稚内、宗谷岬、浜頓別、上湧別、網走など北海道の北半部を網羅し、多大な成果をあげました。また、多くの関係者からご援助を頂きました。大学では、大御所の多田文男先生の授業に緊張したのもこの頃でした。

4年次は卒論・就職活動に皆、懸命でした。また、工業地理学の渡辺一夫先生、新進気鋭で自然地理学の小池一之先生、集落地理学の桜井正信先生、気候学の関口武先生などあこがれの先生の授業が瞬時に終わった様な1年でした。

また、現在教授の長沼信夫先生は助手としていろいろお世話下さいました。大和先生はじめ、諸先生方のご支援もあり、卒業式までに42名全員の就職が決まりました。そのほとんどが教職関係の仕事でした。

仲の良さの証拠として、同期会が以前は3年ごと、最近は2年ごと、全国の同級生が幹事となり各地で開催し、昨夏（銚子）で9回目を迎えました。この会は先輩、後輩、他学科の方々も参加して下さいが特徴です（次回は、来年夏に長崎で行う予定です）。

昨年「還暦」を迎え、第一線から退きましたが、これからも頑張っていく所存です。

（東京都立小石川高等学校）

## 忘れ得ぬ日々

### 土屋 邦子（1965年卒）

平成15年8月1日、銚子市犬吠崎のホテルで駒澤大学地理科卒業の同窓会が開かれた。昭和40年3月に卒業した方々をメインにその前後の先輩や後輩の方々を含めて22名が揃った。懐しい人や卒業以来絶えることなく親しくしている友との語らひは、郷土料理をつまむ間も惜しむ程続いた。その会場はさながら当時の大学のキャンパスであり、青春真只中の若き日々の友であった。このすばらしき友との出会いは、昭和36年4月の入学式からはじまった。その日は雨だったと憶えている。

当時地理科の先生方の研究室は本館？の奥の

方にあった。廊下をはさんだ向い側に細長い実習室と呼ばれる小部屋があり、授業の合い間の控室としてや自習室として学生に開放されていた。その部屋の窓から歌手の越路吹雪の家が見えた。その姿を見たとか見たいとかたわいない会話が妙に懐しく甦える。研究室には大和英成先生がいつもいらして我々学生と親しく接しあれこれとご指導して下さいました。研究室や自習室での思い出は枚挙にいとまがないほどである。

卒業後研究室に大和先生を訪ねたことがある。その年の12月に第一子の出産を控えていた秋の初めの頃だったと思う。その頃私の職場では

産休をとる事例が少なく、産休中の補助教員は自分で捜さなければならない状態であった。研究室で大和先生にその旨のことを申し上げ相談したら「心配するな。産休に入る前までは必ず捜すから。大丈夫。元気な子を産みなさい」と先生のことば。初めての出産に対する不安と仕事を続けることが出来るのかという不安がいつぱんに吹き飛んだ一瞬であった。先生の慈愛に満ちた眼差しを今も鮮明に憶えている。その時生まれた子は今 35 才。1 児の父親となっており、私もその後第 2 子も授かりおかげ様で今なお現役である。

昭和 39 年 6 月に発生した新潟地震の日のことも忘れられない。その日の午後、自然地理演習の授業を受講する為に地下の教室にいた。授業が始まる前だったかと思うが、突然大きな揺れ

が襲った。教室内は騒然となり「かなり大きな地震」を直感した。その夜のテレビで新潟での石油タンク炎上の映像等を見て改めて恐ろしさを覚えたことが昨日のこのように思い出される。液状化現象ということばも初めてこの地震で知った。しかし授業の内容はどうしても思い出せない私である。

呑むほどに酔う程に六十路に達した青年たちは思い出や来し方行く末を熱っぽく語り合い夜の更けるのも忘れていた。その夜の銚子は濃い霧につつまれており灯台の灯がぼおーとかすむ中に霧笛が鳴っていた。この会ももう 9 回を数える。2 年後の 10 回目は長崎市で開かれる。駒澤大学地理科に学んだ者同志が集い、更に闊達に生きる力を与えてくれえる会である。

## 「駒大地理」時代の思い出

若林 宏宗（1966 年卒）

40+35=75。このほど地理学科 75 周年記念の案内を受け取った時、左記の数字が頭をよぎり、感慨一入であった。大学院博士課程の時に「駒澤大学地理学科 40 周年記念：日本・アイスランド学術交流調査団」を組織して渡氷し、その翌年から高校教師となって今年で 35 年、群馬県立桐生高校の校長として退職するところである。私の 2 つの区切りは、駒大地理学科の区切りにピッタリ。周年記念と一致するのである。

高校卒業後、私は東京のお寺の養子となり、駒大には仏教学部禅学科に入学した。しかし、

思うところあって 3 日坊主ならぬ 3 カ月でお寺を飛び出し、2 年の時に文学部地理歴史学科地理専攻に転部・科したのである。父には勘当され、4 年間、週に 3 日くらいは働いて学費、生活費を稼いだ。そんな中でも、みんなに後れをとるまいと必死で勉強した。特に、東京周辺の日帰り巡検をはじめ、北海道巡検など、見知らぬ土地に入り、あれこれ調査して議論するのがたまたま楽しく、嬉しく、辛いことに耐える糧であった。

2 年の夏休みに東京から四国を一周した自転

車旅行は、地理専攻生になった張り切りで、「四国の産業と観光」と銘打ち、1 教室を借り切って 1 人で発表会をした。地理専攻生の多くが聴きに来てくれたが、この時が自転車部創立のきっかけとなった。自転車同好会は 1 年で部に昇格し、私は初代主将として骨格を組み上げた。その自転車部は営々と活動を続け、早くも 40 周年を過ぎたのだから「光陰矢の如し」を実感する。

部活動とともに個人的には、日本一周自転車の旅と富士山頂自転車登山（写真）を達成したのが思い出深い。特に富士山頂自転車登山は、日本一周したのと同じ重装備での登山で、自転車の不定形とともに容易ではなかった。しかし、雲の上、3776m の噴火口一周サイクリングは最高であった。今、近くを歩いて富士山頂を見上げた時、自分が実際にしたことでありながら、「若さ=バカさ」のエネルギーによるそのことが信じられない。

学部の 4 年間は、地理学の勉強が中心だったが、自転車部のほか学友会の会計監査委員長なども務め、公私ともに充実していた。神宮の杜に野球の応援に行ったのも懐かしい。

4 年になった時、新設される大学院への進学

を大和先生に勧められた。経済的に学部卒業がやっとの状況でダメだと思ったら、父が勘当を解いて大学院の授業料を出してくれることになった。奨学金と高校講師などでどうにか学問い続けられる中、アイスランドまで出かけられたのは幸運だった。平成 16 年 1 月 24 日、大学会館において「駒大大学院に地理学専攻創設のころ」と題して講演することになった。一所懸命に話そうと思う。（平成 15 年 12 月 19 日記）



（写真） 富士山頂・噴火口端にて  
（若林 1965 年富士山頂自転車登山）

## わが大学時代の思い出

塩田 安成（1967 年卒）

駒澤大学地理科設置 75 周年事業の節目の年に、自身も 38 年間の教師を退職という人生の岐路を迎えるわけで、感謝をこめ大学時代の思い

出を三つほどあげてみたいと思います。

第一に、入学して夢中になったことは美術部での油絵三昧の毎日。3 年連続「大学美術連盟

展入選」の快挙？を成し遂げたのでした。地理研究室よりは、部室へ通ったほうが多かったようです。友達も必然的に美術部の連中が中心でした。中・高校時代の「ムリ届にゲンコツ流」の柔道部とは雲泥の差。独特の自由な空気の中で絵を描き、酒を飲み、人生を大いに語ったものでした。この経験が教員になってからバレーボール部の監督として、県下で満足のいく成績を残せた原因ではなかったかと考えております。油絵もバレーボールも、キャンパス（コート）に向かってどんな風にすればという点では同じものでした。限られたスペースでどんな色（選手）をどのように使うかで、全く違う絵（チーム）になるのです。色（選手）の個性をうまく調合するととんでもない絵（チーム）が出来るのです。中・高校での体育会系。大学での文化会系という2分野の異質な貴重な経験が、剛と柔を合わせ持った監督生活の支えとなったのです。

第二に、大学4年間で沖縄を除く（当時沖縄は米国施政権下）すべての都道府県を国鉄で廻ったことです。仲間と勝手に鉄道研究会なるものをデッチあげ全国津々浦々旅廻り。その軍資金稼ぎにやったアルバイトは20数社。3年次には3分の1はアルバイト。3分の1は旅廻り。その暇を見ては授業という本末転倒な生活。地理学生は自分の目で確かめなければ、現地のフィールドに立たなければと口酸っぱく御教授頂いた多田教授の教えを忠実に守ったものでした。授業をサボっては鉄道の旅。大学の成績は最低。小池教授には教員採用試験時に「越後人があまた教員採用試験を受けるようだが、塩田おまえだけは教員は無理である」と宣告をされる始末。理論はあとで勉強すれば何とかなるさ、大学時代の体力のあるときにこそ貴重な体験をと屁理

屈こねては全国への鉄道の旅。結果としてそのことがその後の教員生活にどんなに自信になったことか。自身の身体で得た経験がどんなに大切かを、旅行を通して学んだような気がします。

第三に旅費捻出のために1日2食の自炊生活。来る日も来る日もラーメンライス。当時発売されたインスタントラーメンはほぼ完食。肉はクジラかマトン。送金の当座だけは食生活は向上するものあとはいつも素寒貧。金がなくなれば友達の下宿に居候。この経験がいまだに生かされ無類の悪食。生活習慣病。食い意地が張り男子厨房に入るの口で、このことだけは家内に褒められることしきりである。

そんなこんなの学生生活を経て、平凡な田舎教師に。20年程前から教員生活の暇を見ては授業の教材研究と称して「旅の虫」のおもむくままにアジアへ進出。大学時代の癖が抜けずにいまだに安宿泊まりの鉄道旅行。どんな片田舎でも人生青山有。案内書にもものっていない田舎の食堂で現地の焼酎でも飲んでのんびりしているのが人生最高。こんな思いでアジアに行けるのも大学時代に培った探究心？と素寒貧生活のお蔭なのかもしれません。

いずれにしても今日があるのは、地理科に在籍したからなのです。その意味では本当に感謝、感謝なのです。しかも、その後の人生を左右したのも学生時代の貴重な経験だったのです。大学時代にどんな学生生活を送ったかが、自分の将来を決定するように思えてなりません。これからは未来永劫に続くであろう地理科の後輩たちが、貴重な意義ある学生時代をパイタリティーを持って自らの手で切り開かれんことを切に望み、地理科の益々の発展を祈念し、拙文とします。

## 思い出の記

通正 隆宏（1967年卒）

昭和37年4月、竹友寮に入寮。1週間遅れの先輩と共にの上京であった。先輩は、兄妹とアパート生活、私は1人誰も知り合いのない寮へ。部屋では、早々に入寮した1年生4名が寮歌、応援歌を一生懸命に練習していた。目はひきつったようになって、異様に写ったことをよく覚えている。私は、何をどうしたら良いのかわからず1人傍観していた。だが日がたつにつれ、寮での指導期間は、緊迫感を持ったものだった。午前3時、寮内にベルが鳴りわたる。部屋前に整列、点呼、その後正座、学園内をかけ走りながら応援歌や寮歌を歌い、又清掃（作務）座禅、法衣を着用しての仏量器を使つての朝食、朝課（経を唱える）等の活動内容がきちんと決められていた。寺院の子以外にも同様な寮生活であったためか、夏休みまでには、1年生は半分は退寮したように思う。特に突然にベルが鳴るため、常に学生服を身につけ、ふとんは万年床のため畳に「キノコ」がはえたりしたこともあった。竹友寮では今もあのように厳しい指導期間があるのだろうか。苦しい指導期間が終わると、寮生活も少しずつ楽しくなり、次第にはめをはずすようになった。2年生になると竹友寮から、元野球部の寮だった所へ引越し、指導的な立場で1年生を指導（？）したけれども1年生の反発にあい早々と退寮し下宿生活となった。この

頃になると、地歴科を専攻している友達と仲良くなり食事や映画など共にしたり、いろいろ話し合ったりした。又他校の学生とも友達になり次第に大学生活も充実したものになっていった。卒業後30年以上たった今も互いの友好が続いている。高校時代からの円形脱毛症で苦しんでいた私は、目や心は刃物のように研ぎすまし、いつも身構えていたが、友はそんな私をいつも温く迎えてくれていた。だが大学3年目、脱毛症がひどくなり九大病院に6ヶ月間の入院となった。卒業が1年遅れる、これほど悲しく悔しいことはなかった。卒業をこれ以上延ばせないと5年目は単位修得につとめた。北海道での現地研修は、1年後輩と共にすごしたが、酒を飲んで早く終わることを願ったことしか覚えていない。なんとか無事卒業し古里大分で教員として30有余年たった。あと数ヶ月で退職、そんな時、同窓会報が届いた、竹友寮でよく聞いた挨拶「押忍」の言葉の意味や五感の傷が、私の理念としてずっと心の中にあり、子ども達の給食指導や、知的障害児教育の根幹としていきつづいている。これは、やはり大学時代に様々な体験の中で学んだ貴重な宝物だと思う。記念誌の案内を知り駄文であるが思い出を綴ってみた。記念誌を通じ、懐しい同僚と連絡が取れると幸甚である。

## 転機となった副手時代

岡田 義和（1970年卒）

1970年3月当時、卒業式を間近に控えても小生は就職が決まっていなかった。不思議と焦りはなかった。卒業式当日、母も上京しており、式に参列した後は下宿を引き払い郷里に帰るはずだった。ところが式当日に文学部総代で頂いた卒業証書を個別に地理学教室で受け取るために列をなす。いざ、証書を受け取るために一歩前に出ると、多田文男教授から『ちょっと残ってください』。今にして思えば、この一声から私の人生が定められたようだ。

### 1.

証書授与後、何人かの先生方の前で『岡田君、就職はまだですか。』『はい』『良かったら、教室の手伝いをしてくれませんか。副手といって助手の下で、2年間という期限付き採用だが給料はです。』『今日、式に来ているので母と相談してみます。』こうして、未知の世界へ足を踏み入れることになる。

副手の仕事で一番楽しかったのが巡検のお供であった。当時、日帰り巡検は0.5単位、1泊2日の巡検は1単位だったと記憶している。桜井教授の歴史地理の巡検で木曾を訪れるとき、木曾地方を被う地形図5万分の1全部と20万分の1、谷筋を2.5万分の1でカバーしてきてくれ、と1万円をくれた。当然お釣りはでるが、『釣りはいらないよ。』となる。きつぷ良く、人情があるので、人気があった。彼を慕う人は『昨日、三軒茶屋のお店で肉をさばっていたよ』となる。

巡検では毎夜学生にレポートを出させる。そ

の提出状況などを点検することもあったが、ほとんど添乗員よろしく教授のお手伝いである。みんな学生で、院生が同行することもあり面倒がない。確か、小池一之先生の高原川巡検だったと記憶しているが、夏の暑い盛りに急峻な山肌を縫うように峡谷の地形を学び歩いた経験がその後の趣味を山歩きにしまうほど鮮烈な印象だった。高山であれ、馬籠や妻籠であれ、日本の原風景を至るところで見つけることが出来た。私の旅好きのルーツは巡検だった。

### 2.

野沢の下宿先から手提げカバン一つで教室に入る私に冷やかしか味に多田先生は水筒を片手に持ちながら『まるでサラリーマンですね』と。そんな時、学生や院生に声を掛け、『地理友の会（FOG）』を創出した。ささやかなサークルであった。当時、論文は『地理学評論』など高度な学術内容を付加されたものでなければ世にでることはなかった。大学生の論文発表の場はゼミの機関誌ぐらいなものだった。私たちのメンバーは上馬の福祉センターで毎週月曜日に集まり、勉強会を開いた。講師は院生が中心だったが、ときには大学の先生も顔を出してくれた。参加人数は毎回8人前後と少なかったが、それはそれで楽しい思い出となった。メンバーが10人を越えるころ、ガリ刷りの機関誌『FOG』を作った。夏休みには巡検もした。長野巡検で姥捨山の千枚田を訪ねたとき「東京から来る」というだけで地区長自ら歓待していただいこともあつ

た。

ある日、上馬交番からということで私服警官がアパートを尋ねてきた。曰く『上馬交番が焼き打ちされたことは知っているでしょうが、実は隣の住人から貴方の家に学生が夜な夜な集まって騒いでいると通報があった。事実ですか。』と詰問される。確かに毎晩のように学生のたま

り場になっていた。隣人はうるさかったに違いない。しかし、刑事には「東京に出て来ている学生は孤独なので、いろいろ相談にのってやっている」と、副手の身分証明書を見せる。納得してくれ、逆に励まされもした。

当時、交流した学生とは今でも付き合い合っており、大切な友人の一群となっている。

## 我が母校：駒澤大学文学部地理学科 75 周年によせて

池内 孝裕 （1970 年卒）

池内 由紀子 （1970 年卒）

池内 啓 （1997 年卒）

私たち親子は、本当に不思議なくらい「駒澤の地理」と深い縁で結ばれており、私たち夫婦が中学生の時の恩師である伊藤勝徳教頭先生は、1936 年（昭 11）頃、専門部歴史地理科に在籍されていた大先輩。また、息子が高校時代に地理の授業を通じて大きな影響を受けた為平邦彦先生は、私たちの同期でもありました。こうしてみると息子は「行くべくしていった駒大地理」のように思えてならないのです。

私たち夫婦が駒澤へ入学したのが昭和 41 年、地歴学科から地理学科へと学科編成が行われた節目の年ではなかったかと記憶しています。地方から上京し、学生同士がまだ余り打ち解けていない状況の中で、同じ高校から入学した私たちは目立った存在だったように思います。

学部時代は大和英成・多田文男先生と山梨・長野県への巡検、西水孜郎先生と茨城県鹿島への巡検、小池一之先生と長野県乗鞍へ巡検に行

きました。どの巡検も楽しく、有意義な経験をさせていただきました。これらの経験が卒業論文に活かされ、妻は山口岳志先生のご指導のもと、私は西水先生のもとで卒業論文を仕上げ、妻は地元の呉市役所に勤め、私は呉市内の中学校に社会科教諭として勤務するようになりました。しかし、その 1 年後、私は再び駒澤の門戸をたたき修士課程に進み、西水先生のもとで工業立地について研究を進めました。修士課程 2 年間では、多くの先生方・学友に恵まれ、人生の中で最高のひとときを過ごすことができました。その後、結婚し息子が成長していく中で常に「駒澤」との関わりが生活の中に出てくるようになり、東京地区での学会、地方での学会へ親子 3 人で出かけたりしたものです。私たちの背中を見て育った息子が大学受験を迎える頃になると、「駒澤大学の地理学科へ行きたい」と奮起し、息子の部屋は駒大キャンパスの全景写真

と「絶対合格：駒澤大」の標語に囲まれる生活になっていったのでした。息子が駒澤大学文学部地理学科に入学した後は、いわゆる「小池組」の一員として自然地理に没頭し、佐渡島への巡検で調査の「いろは」を体得し、その際、「酒宴の指南」も受けるなど小池先生のお人柄にもふれることができたようです。多くのことを学んだ結果、息子も「駒大カラー」にすっかり染まり、神宮球場へ野球部の応援に足を運ぶなど、学部生時代を十分に楽しみ、多くの学友を得たようです。子どものお陰で私たちは、小池先生の還暦の祝いの席にも同席させていただくことができ、この時ほど「駒澤」へ行って良かった、息子が「駒大の地理」へ進学してくれて良かったと実感したことはありませんでした。その後、

息子は小池先生のご指導のもと、地元広島の大学院に進学し、現在、広島市内の高等学校で地理の教諭として勤務しております。私も同じ市内の別の高等学校に勤務しており、「駒澤地理」の血を広島の高校生に伝えることに共にしのぎを削っています。

最後になりましたが、私たち親子があるのは本当に「駒澤」のお陰と感謝している次第です。75周年を迎えるに当たり、今後のより一層の発展を祈念するとともに、広島からすばらしい生徒を駒澤大学へ進学させることができるように、現職のなかで息子とともに「駒澤大学の地理」・「地理学のおもしろさ」を伝えていきたいと思っています。

## 駒大生活 9 年間

### 角田 清美（1970年卒）

昭和41年4月、わたしは文学部地理歴史学科地理学専攻の学生として、200名前後の学友たちと一緒に入学した。羅針盤がないまま、佐賀の片田舎から上京した私にとって、駒澤大学はもとより、東京は巨大な渦巻きのような動きで、右往左往するばかりであった。

渋谷駅から「邪魔電」と称される路面電車は、満杯の駒大生を詰め込み、乱暴な上下左右運動を繰り返しながら、駒澤へ着いた。文部省の指導により、それまでノンビリしていた駒澤大学は、定員を大幅に増加させられ、校内は学生で溢れていた。現在、自転車置場になっている位

置には、急造りのプレハブ校舎があり、7号館の位置には、旧米軍の遺物と伝えられていた、カマボコ型建物が教室として使われていた。

入学早々、地理学科の学生には「オリエンテーション」と称する入魂式(?)が、1号館講堂で行われた。自治・ゼミ・研究・学会・巡検・教授など、わたしには理解できないような言葉を、演壇の先輩たちが繰り返し強調していたことは、昨日のこのように今でも記憶に残っている。薄暗い1号館1階に、地理学科学生の自治会室があり、洗脳されたこともあって、毎日、出入りしているうち、いつの間にか、駒大地理

学科の学生になったばかりでなく、大和英成先生の指導を受けながら、小池一之先生が顧問の自然地理ゼミのメンバーになっていた。

先輩たちは、後輩の面倒をよく見てくれ、放課後や日曜日にはゼミや巡検を、機会あるたびに開いて、また各地へ連れて行ってくれた。先生たちの指導よりも、先輩たちの影響力が強く、先輩たちは神様のような存在であった。そのうち、わたしも先輩の立場になった。駒澤地理学会の仕事や、ゼミの面倒で少しづつ忙しくなった。また学友たちと一緒に、自主巡検を単位巡検に結びつけ、大橋にあった国土地理院・築地の海上保安庁水路部などと事前交渉を行い、飯本信之先生の指導のもと、級友や後輩たちを引率したこともあった。

2年生の秋季頃から、学内でも暗雲が表面化した。当局の学生に対する態度への不満、施設への不満、授業に対する先生たちの不誠実な態度への不満など。わたしも旗を振った一人だが、今でも運動前半の動きは正しかったと確信している。約1年半の学園紛争という「陣痛」を経て、新しい駒澤大学が出発した。大学全体の雰

囲気が少しずつ良くなり居心地が良い大学となった。この頃、小池一之先生は学生部長で大活躍であった。3年生末頃、簡単に卒業するのが惜しくなり、また多田文男先生の指導もあり、しばらく居残ることにした。

これより前、3年生の時から、講師として大学院へ都立大学の中野尊正先生と貝塚爽平先生が御出になった。受講生は阿由葉・若林両先輩のみだったので、多田先生から「後ろの席で、邪魔にならないようにしていたら」という約束で、6月から聴講させていただくようになった。が結果としては、両先生から大学院を通じて、以降7年間、御指導を受けることになった。両先輩が欠席の時は個人授業で、学問の面白さを多岐に渡って教えて頂いた。両先生が見えられてからは、駒澤と都立が近くなり、また都立大学の野外巡検には、矢吹さんが運転する駒澤のスクールバスが使われたため、都立の巡検に駒澤の学生も参加できた。このような環境で、都立の町田 洋・菊地隆男・堀 信行・門村 浩・松田磐余の各先生、また院生や学部生たちとも親しくなり、今でもお付き合い頂いている。

## 37年前をふりかえって

### 姫野 憲幸（1971年卒）

戦後のベビーブーム世代に生まれた我々が、地理学科に入学したのは昭和42年（1967年）であった。その3年前には東京でオリンピックが開催され、地方にいる者はテレビでオリンピック観戦をしたおりに隣の駒沢公園を幾度とな

く画面で見たものだった。その会場を隣にした大学への入学は入学式で驚かされた。式場の正面には仏様が鎮座していたからである。ガイダンス！ 初めて聴く言葉であった。これからの学生生活と地理学科での勉強についての説明会

である。教科書・地図帳の著者として高校生にもよく知られていた、多田先生、大和先生をはじめ、多くの著名な先生方、新進気鋭の小池先生のもとで講義は進められていった。一般教養の勉強はプレハブ教室や完成したばかりの8号館などの大教室でマイクを通しての講義であった。地理学科は英文科や国文科と一緒に講義を受ける機会が多く、他学科の学生とも親しくなれたが、専門分野に進むにつれて一緒の機会が少なくなった。

地理学科学生と先生方のための地理学研究及び親睦をはかる会として駒澤地理学会があり、地理学科入学生は自動的に会員となっていた。学会の小部屋が2号館の階下であり、ここでは講義や卒論・巡検・書物・アルバイトなど様々な情報が交換され、地理学科学生の心のよりどころ的な場所でもあった。諸先輩方は本当に良く勉学をされており、そこで良く議論をされていたのが印象に残っている。巡検は学会の委員を中心に、学生の有志が講義担当の教授と相談をし、場所・日程を決めて、日帰りや宿泊の巡検を実施していた。帰りのバスの中でレポート提出の条件が指示されると、そこで巡検はいちおう終了で、バスの中は学生相互・教授との懇親会場と化し、まさに学生生活を謳歌するといった感じであった。当時は東京や通学可能な東京近隣の学生よりも地方からの学生が多く、学内の寮、祖師谷寮、各道府県出身の学生のための寮をはじめ、間借り、下宿（賄い付きは少な

くなりつつあった)、親戚の家などから通学していた。親しくなった友人の所に遊びに行った時には、各人の生活感が出た環境に新鮮みを感じたものであった。

地理学科75周年、いや、大学にとっても、大きな出来事は学園紛争であろう。当時、ベトナム戦争が拡大され、それに反対する学生運動や各大学において学生による大学民主化が叫ばれており、駒澤においてもその運動がおこった。そのことに対する学校側の処分に対して、民主的・誠意ある対応を求める地理学科の先輩・同僚らのハンガーストライキは全地理学科的・全学的な運動・紛争へと発展した。外部から様々な学生運動各派が入り乱れての混乱で、東大の安田講堂事件の前に起きた出来事であった。授業はレポート提出に変えられたり、卒業式が執り行われなかったり、おそらく大学はじまって以来の大混乱であったろう。多くの学友が精神的・肉体的に傷ついて混乱は終わった。昭和46年に卒業し、その後、3年間大学に席をおいて勉強する機会を得たが、大学は徐々に変化していったと感じている。各人が描いた未来とはどの程度かけ離れているかは定かではないが、確実に民主化していくのを感じた。その一方で、駒澤地理学会が消滅し、学生が自ら企画していた巡検がなくなったことは残念でならない。(現在は地理学教室で企画して、巡検を実施しているということであるが。)いつの日かその復活を強く望むものである。

## 1970年代の断章

矢延 洋泰（1973年卒）

“75周年”のお祝いを申し上げます。

私が入学したのが1969年。地理を勉強したいという思いが募り、高校卒業後すぐに入った理科系の大学を中退して駒沢に入り替えたが、身近かに卒業生もいなかったこともあり、学科に対する思い入れの割には、大学全体に対する認識は希薄なものしかなかった。

しかし、結果的に学部4年大学院5年と9年間も駒沢にお世話になったということは、相当に居心地が良かったものと思う。それは多くの個性あふれる素晴らしい先生方や、志を同じくする友人たちとの出会いがあったからに他なるまい。

ただ、入学当時大学紛争は燎原の火のごとく全国に広がり、駒沢もまもなく断続的に休校、封鎖が繰り返され、静謐な雰囲気はキャンパスから消えていくことになる。そんな中私は環境問題(当時は公害問題といった)に興味をもち、海図のないまま大海原に漕ぎ出した船のように、全国各地の公害現場を歩き始めていた。大分県臼杵では、作家の故野上彌生子さんの生家に2週間ほど逗留させていただき、セメント工場進出を阻止した漁師のおばちゃんたちを題材にした『風成の女たち』の作家松下竜一氏にお話を伺う機会を得たり、東京にいるときはいつでも、犬も歩けば棒にあたるを地でいくようにあちこち徘徊していた。あるときも当時十条製紙会長で、近代製紙工業の黎明期のことを随分と著しておられた故西済氏を会長室にアポなしで

お尋ねし、長時間に渡り製紙公害について率直にお聞きしたことなどが思い出される。

大学院に入る頃には大学も徐々に落ちつきをとり戻しつつあったが、放浪癖は相変わらず、院の入学式も出ないまま地方に出掛けていた。それでも学部とちがい先生方との接触の密度は一段と増し、人となりに接することができたことは、今に大きな財産となっている。

こんなこともあった。自然地理の人達からだったと思うが、故多田文男先生の75歳であったか、誕生日のお祝いをしようという呼びかけがあった。その日居合わせた院生達が参加して、タリム盆地にタクラマカン砂漠、それを取り囲む山脈をモチーフにしたバースデイケーキを近所のケーキ屋に作ってもらい、先生には院生室まで御足労願ってお祝いをしたことがあった。突然のことに大変喜ばれたが、一方で、誰かのこれをケーキにという提案にみんなが賛同したのも、先生のこの地域の授業はこの他強く印象に残っていたということでもあろう。

また、大学院博士課程のときであったが、縁あってイタリア政府の招請で、トスカーナ州のシエナ大学に短期留学のチャンスを得た。その折、多田先生や桜井正信先生には随分と心づよい励ましをいただいた。同時に多田先生から、当時一橋におられた竹内啓一先生にご紹介下さり、初対面ながら懇切丁寧なアドバイスをいただき、初めての海外渡航に勇気を得て出掛けられたことが、昨日のこのように思い出される。

改めて誌上をお借りして先生方には感謝申し上げる次第である。

これをきっかけに私の研究も、多少なりとも外に眼が向くようになり、その後、イタリア研究は道半ばとなったが、今日に到るまで四半世紀以上にわたって、東南アジアの経済開発、社会文化、環境に関心の軸は移ることになる。振

り返ると本籍を駒沢に置きながら、若さだけをよすがに喉の渇きを癒すオアシスを求めるようにひたすら歩き回った日々、そんな私をいつも故郷のように温かく迎えてくれたのが、駒沢大学であり地理学研究室であったように思う。これからも益々の発展を卒業生の一人として祈念したい。

## 回想・・・駒澤大学地理学科

南 和朗（1974年卒）

私が、駒澤大学文学部地理学科に入学したのは、昭和45年である。日本の高度経済成長期の真最中である。高校生の時、担任の先生に地理を勉強したいのなら「高校の地歴の先生は駒澤大学出身者が多いぞ」の薦めの言葉もあり、大好きな教科「地理学」を究める（ちょっと大げさ）為に駒澤大学の受験勉強をすることとなった。一生懸命頑張った。皆様の御陰で他の大学は、まったく受験せずに駒澤一本で合格した。大変うれしかった。入学前は、大学の授業のこと東京での生活のこと、他の人と同様、希望に夢膨らませて入学式を迎えた。法人としての駒澤大学の事は、無知に等しかったので、式典でお坊さんが「右へ左へ」「出たり入ったり」したのに異様な雰囲気があったのを覚えている。・・・夏、鹿児島に帰省した時両親に話したら興味を持って笑っていた。三十数年を経過し回顧すると他大学にないすばらしい誇れる光景である。

一連のオリエンテーションも終わってよいよ

よ授業です。学生運動の名残か残党か。ほんの5～10人位ずつの学生が、各セクト毎に入れ替わり立ち代り今では、なんと叫んでいたかは忘れてしまったが、顔をタオルで隠してヘルメットを被って彼らなりに頑張って思想的に何かを主張していた。私は、ノンポリだった。

一般教養科目は、いずれも経験したことの無い広い教場が多かった。割と興味深く先生の話は聞けたが、音響の悪いプレハブの教室もあった。机と椅子は、簡単な物で貧弱で3人ずつ腰掛ける事も有った。大学の入学定員増に施設が追いつかない状態だった。5号館は、室内で冬はボイラーを焚いていたのが思い出される。

語学は、旧1・2号館と7号館で授業があった。旧1・2号館は、狭い通路をぐるぐる廻ってひんやりした教室に行った。中庭では、ロッククライミングの訓練をサークル部の者がやっていた。落ちはしないかと気になって授業より外を見ていた。歴史の有る教場で一番懐かしい。是非保存して頂きたい建物でも有った。授業は、高校

の授業みたいだった。

地理の専門科目は、それぞれの科目について専門の先生が、いきなり専門分野の話になるから、当たり前のことだが、そのレベルにない学生は、面白くない。付いていけないのだ。私も良く味わった。高校の地理のおさらいをする訳ではないが系統立てて数ヶ月間、本題への導入授業のできる先生がいたらもっと地理が面白いのではないかと思った。

巡検については、宿泊を伴う場合は、最高に楽しみでした。思い出の巡検は、夏の阿由葉先生（現早船先生）の指導で、岩槻の人形会館～大間々扇状地の古井戸の調査（2泊）。いろんなグループに分かれて諸々の調査。畑の新鮮な西瓜もこっそり食べた。皆日焼けして黒くなった。4年の夏にI君・K君・M君の4人で、北海道

巡検に津軽海峡を連絡船で渡って14日間行ったのも学生時代の最高の思い出として残っている。残念ながら単位は貰えなかった。

4年になったら授業を受ける数がめっきり減った。週に3～4日しか大学に行かなくなった。久しぶりに顔を合わすクラスメートも増えた。12月に就職が最終決定した。はらはらしたが希望通りだった。卒業前は、同級生の下宿先を順番に廻ってよく飲んで語った。角瓶が美味しかった。スキーにもはじめて行った。「神田川」を良く歌った。すべてが思い出だ。同窓会便りが最近来るので楽しみに見ている。大学の近況は、わかっているつもりです。鹿児島支部でも同窓会が時々ある。欠かさず参加している。最近は、始良地区でも同窓会を組織しています。……駒澤大学は、私の最愛なる母校です。

## 木沢 綏先生とラバウル火山研究所

清水 長正（1977年卒）

往々にして学生は習った先生の来歴や本当のすごさを知らずにいるものですが、ごく最近、たまたま古本屋の書棚で見つけた戦記本のなかに木沢 綏先生（元・気象庁）のことが載っており、すこしばかりしました。昭和50年（1975年）当時、木沢先生は地理学科の地球物理学の講義を担当されており、一見優しくなおじいちゃんといった感じの先生でした。講義の中で地震のマグニチュードの計算法を丁寧に解説され、「地震のニュースでマグニチュード〇〇をおっしゃるアナウンサーはこの計算法を知らない

のですねー」と言われていたことを思い出します。うわさでは、かつての鳥島の測候所長で、新田次郎の小説『火の島』に登場しているらしい、ということも聞いてはおりましたが、それ以上はどのような業績のある先生か全く知らずじまいでした。

木沢先生のことが載っていたのは、戦時中のラバウル海軍最高指揮官による手記『ラバウル戦線異状なし』（1976、光和堂）で、その中の「火山研究所と科学者の良心」という記事です。戦時中に行われた学術研究の証言としても大変興

味深い内容ですが、全文は長いので以下抜粋します。

…昭和17年1月ラバウル占領後、わが海軍はここに火山研究所を設けた。所長は木沢綏というまだ28歳の青年で、この人は終戦までラバウルに残り、その後気象台にもどり、現在は気象庁の地震研究部長である。まことに温厚な紳士であるが、学術に関してははっきりとした一個の見識を有し、強い信念の持ち主である。

ラバウルの港は火山に囲まれているようなもので、現に噴煙を上げつつあった Tavarvar 火山（花咲山）があり、また Vulcan 火山（西咲山）の1937年の噴火はラバウルの街に最大の被害を与えたものである。考えてみると何時何処かでドカンと来るかも知れず、万一そんなことが起こった時に港の入口を塞がれてしまう。それで占領当時の海軍指揮官はこの点を慮り、海軍大臣に意見具申をして「速かにその道の権威者を派遣して現状の調査、噴火の予知等に着手する要ある」旨を述べたところ、海軍大臣より文部大臣を介して中央気象台長藤原咲平博士の人選により木沢君が所長として派遣されたのである。

火山噴火の予知ということは、当時、全世界の学会でも未だに成し得る段階に達していない問題である。…このような一方ならぬ苦心をもって事前研究を重ねた上、着任後現地における地盤傾斜と火山地震と微動の観測を続け、充分な確信を得て、木沢君は次の如く明確なる報告をされた。「ラバウルの火山は、ここ2カ年はわれらの全機能を停止する如き大爆発はしない。今の活動も程なく終る。もしここ2年間に人命および各機能に関するような爆発のある時は一週間前に必ず通知できる。(以上)」

それにしてもかかる場合責任者として、かく速かに明確なる断言をすることはなかなかむづかしいものと思うが、この点本当にえらかったと敬服する。われわれはこの報告により一応安心するとともに、万一の場合には予報を得て速かに避難する方策を決めていたのであるが、それは杞憂に終り、木沢君の報告の通り花咲山の噴煙も次第に収まり、終戦のころには殆んど休止の状態となり、何事もなくすんだのである。

かようにして、終戦後も10月半ばごろまで観測の仕事が続けていたが、研究所の人々は集団キャンプに移ることになった。その際に木沢君が言われるには、

「この由緒ある（観測）器械類を、その価値を知らない人達のために一般兵器と一緒にたたきこわされるのは、何とも忍びないところです。それで私どもの考えとしましては、説明書を添えて、これを進駐の豪州軍を経て豪州政府に寄贈したら一番よいと思います。そうすれば今後もこれらの器械は大いに役に立つことになるでしょうし、また一面においてわが日本軍がこの最前線の戦場において終始綽々として、かような学術研究を続けてきたということを世界に紹介するのもまたよかろうと存じます。」

木沢君等は研究所を去るに臨み、器械類を調整、整頓し次のように英文で掲示した。

「これらの器械は戦の初めから終りまでを通じて、世界文化のためと自然科学の発展のために各々その役目を果たしてきたものである。今私がこの職務を去るに当り、これらを来るべき時代の人に呈し度い。1945年10月15日 日本海軍火山研究所長」

その後、機器類は全部先方へ渡されたが、木沢君が豪州軍司令部に出頭したところ、占領軍

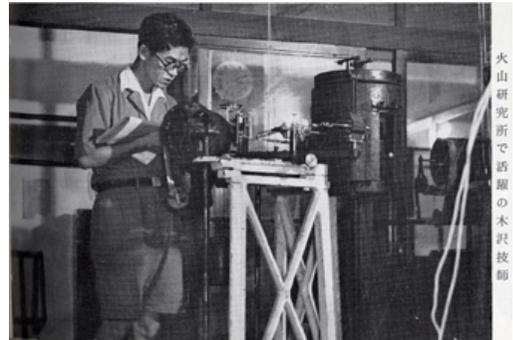
司令官よりの言葉として、「木沢技師は極めて良心的な科学者で、数年間ラバウルで実施した観測の成果やまたこの度の器械の処置に対しまことに敬意を表する。豪州本国からもさよう伝えて来ているが、心からの将来の成功を祈る」という謝辞が伝達されたそうだ。話しはこれで終る…（元・南東方面艦隊司令長官 草鹿任一）

これにすこし後日談を加えますと、1995年に丸善から出版された『空からみる世界の火山』という本に、ラバウルカルデラの記事があります。それによると、最近でもカルデラ縁の火山がたびたび噴火しているが、戦時中の1941～1943年にも噴火が繰り返され、日本軍が設置した煤書き地震計が、ごく最近まで40年間以上使われていたとのことでした。

## 文献

草鹿任一（1976）『ラバウル戦線異状なし』光和堂，291p.

荒牧重雄・白尾元理・長岡正利（1995）『空からみる世界の火山』丸善，207p.



（写真）ラバウル火山研究所での木沢先生

出典：草鹿任一（1976）『ラバウル戦線異状なし』光和堂

## 歴史地理学科4・2・2の体験

### 根本 直樹（1979年卒）

私が地理学科の3年生に編入学したのは、1977年でした。歴史学科を卒業してからの2度目の入学です。学部時代は、考古学を専攻し土器の編年を重視する世界から別の学問へ移行したいとの希望をもっていました。指導教員であった倉田芳郎先生から「卒業するの？」との質問に対して、地理学科に編入しようとの意思を伝えました。「だったらいいよ」という返事でした。多分、そのままでは卒業してはいけないという判断だったと思います。つまり、勉強が足

りない学生だったということでした。

編入生にとって少し大変だったことは、1年生から3年生までの必修科目を一挙に履修しなければならない点でした。1年生の授業では、多田文男先生の講義を聞く事ができました。しかし、その時はどのような先生なのかも知らずにただ若い学生とともに聞いていました。巡検は2年生と3年生の両方を3年生で履修しました。当時は、仕送りがなかったので負担の少ない益子と館山の巡検を選択しました。益子の巡

検が縁で卒論の指導をしていただいたのが長沼信夫先生です。

長沼先生にはいろいろとご指導していただきました。特に印象に残っている言葉は、卒論の中間発表を10月頃にした際に「今はそのようなことを考えている時期ではないでしょう」という先生からの指摘です。私の発表の内容が、系統地理学と地誌学の違いなどを考えていて具体的な事例に入っていなかったのが先生が危惧されたからでした。この頃は、地理学に対する疑問で頭が一杯の時期だったと思います。それに対する長沼先生のご指導によって少しずつ解消されていきました。

1979年に地理学科を卒業するとともに、大学院修士課程に入学しました。指導教員は、小池一之先生でした。小池先生には試験を受ける前から「特別扱いをしないのでしっかりやってください」との言葉をいただいていた。このこともあってか先生に対しては終始緊張していたような気がします。また、私自身が自然分野になりきれなかった負目もあり院生として先生

の研究室でお世話になっている事への申し訳ない気持ちがどこかにありました。

大学院での講義は、非常勤でいらしていた貝塚爽平先生や中村和郎先生などの講義が印象に残っています。特に、中村先生に対し私は多分に質問魔だったと思います。自分が人文的な方向にあることを自覚させられる講義でもありました。中村先生には就職以降もいろいろとお世話をいただいています。社会人としての学びを継続できたのも先生の支援があったからだと感じています。

実は地理学を学んだ4年間は、学部時代にそれ程話す事が少なかった倉田先生との交流の時期でもありました。この時期に先生の研究室によく出入りしたものです。このように私にとっての駒澤大学で学んだ8年間は、まさに当初の専門部の歴史地理学科を体験したような貴重なプロセスだったと思います。そして、地理学科卒の履歴はその後の私の人生において大きな意味をなしてきた事もまた事実でした。

## 駒澤大学地理学科に学んで

### 大和 伸友（1984年卒）

学部入学が1980年4月、大学院で指導を受けてキャンパスを去ったのが1989年3月。80年代前半は第2次石油危機後の不況、半ばは円高不況、ところが後半は“バブル景気”とのちに呼ばれた時代でした。この時代の私の思い出はほとんどが駒澤大学と関わりがあり、私的な思

い出があふれてきます。楽しかった学部時代、充実していた大学院時代の思い出を書かせていただきたいと思います。

学部での指導で思い出深いのは何と言っても野外巡検でした。テーマのおもしろさと巡検先への興味から、希望して早船元峰先生の黒部川

扇状地，足尾・大間々扇状地の巡検に参加しました。仲間と参加した巡検は，見る物すべてが面白く，写真やメモを（たどたどしくも）一生懸命とっていた記憶があります。その後，レポートを提出するのですが，写真や農家を戸別訪問しての生のデータを，どのような視点で，地理的認識へとまとめるかはとても苦勞しました。反省すると，熱意や感動はあっても見るべき物が見えていなかった，巡検への認識が甘かったと思います。西村嘉助先生のもとでの卒業論文は，私の実家のある青森県太平洋岸の1968年の十勝沖地震の斜面崩壊災害について，土地利用の変化と地形の分析を試みましたが，やはり問題意識と分析が甘い内容でした。こんなボーッとした学生を暖かく指導してくださった先生方に深く感謝いたします。

もう少し勉強がしたいと大学院へ進みましたが，多くの気の合う仲間とわいわい過ごした学部時代とは様変わりし，同期生は3名，地理専攻大学院生も10名ほどでした。授業は専ら先生方の研究室で数人単位です。否が応でもごまかしがききません。私は学部時代の反省から，テーマを絞り込んで詳しく分析すれば何とかなるのでは？と焦点を地形に絞りました。指導教官である西村嘉助先生の授業では，研究計画や進行を詳しく検討いただきました。また，駒澤大

学ならではの多くの諸先生から教えをいただきましたが，小池一之先生からは，日本の地形学を考える上で欠かせない論文を解説いただきました。春～秋の半分はフィールドへ出ていましたが，露頭に振り下ろしたハンマーが，期待したテフラ（火山灰）を探し当てた時の感動は忘れられません。

大学院生が使用できた院生室は，私の在学時に2度の引っ越しがあり，この度により良い環境へととなりました。私は学年が上がるにつれて，安く狭い部屋へと移り住んだこともあり，院生室を使わせていただけたことは幸いでした。この部屋に長居するうちにいただいた大学院諸兄の叱咤と教示も良き思い出です。駒澤大学院の特色として，大学院の研究紀要発行があります。先生方の指導を仰ぎながらも，大学院生が編集・出版に取り組み完成させるという学術誌発行は他の大学に見られない特色でもあり，現在に続いていることから驚きでもあります。

本当に，駒澤での大学時代を思い出すと，すばらしい先生方と恵まれた環境で幸せであったことかと懐かしくなります。最後になりましたが，当時の先生方と学友には深い感謝を，現在の駒澤大学の先生方には厚い敬意を，学生諸君へは一層の活躍を期待して筆を置かせていただきます。

## 自然地理学研究会と下北半島・那須野原巡検

森野 泰行 (1988 年卒)

私の大学生活にとって忘れることのできないものの1つに、自然地理学研究会（自然ゼミ）があります。小池一之先生とフィールドワークに同行したことや自然ゼミを通しての経験。私だけでなく、当時「四ゼミ」とよばれていた山村地理学ゼミナール・集落地理学研究会・地理学研究ゼミナールに入っていた人は、みな同じような思いを持っておられるのではないのでしょうか。といっても、私の場合きれいごとだけではなく、あまりの重責に小池先生や自然ゼミから逃避し、同輩・後輩に迷惑をかけてしまったこともあるのですが…。2年生の春、3年生が不在ということもあって、ゼミ長を任されました。当時の自然ゼミでは5月に新歓巡検と称して三浦半島へ、8～9月に5泊程度の大巡検を、学園祭の時期に2泊の中巡検を、その合間を縫うように日曜巡検と称して日帰りで三浦半島や相模川などへ行くのが通例となっており、それらの準備などに毎週1～2回程度のゼミを行っていました。ゼミ長ともなるとおおかたの巡検で予備巡検を行い、巡検の内容を吟味し、案内できるようにしなければなりません。年間最大の行事ともいうべき大巡検には重責がのしかかってきます。フィールドとして選んだのは青森県下北半島。問題はお金もない、運転免許もない、知識もない自分がどのようにして下北半島の巡検の案内役を務めるかでした。このころ自然ゼミOBの大学院生、岩崎孝明氏がむつ市でアパートを借りて下北半島のフィールドワークをし

ておられるのを聞きつけた私は、アポなしで、夜行列車に飛び乗り、下北半島へとでかけたのでした。7月の終わりころだったと思います。良く言えば「積極的」、悪く言えば「無謀」。しかし当時の私にとっては真剣そのもの。先輩に会えなければ野宿でもいいかと、シュラフやテントまで持参する始末。東北線野辺地駅で列車を降り、ヒッチハイクという若さゆえできる技でむつへ。地理学科なら行き着かなきゃ「恥」と少ない手掛かりから先輩のアパートを探しだし、そして無事たどり着いた私は先輩から居候の許可を得、まずは寝床を確保。さらに露頭近くまで毎日送迎してもらう。そんな先輩の厚意で足回りを確保。それどころかポイントになる露頭の要点まで教えてもらい1人のフィールドワークを始めたのでした。フィールドワークのあとには毎日のように薬研温泉の露天風呂へ連れて行ってもらうなど、どこまでも厚かましく過ごさせてもらいました。ある日の夕暮れ、「イカ3杯100円」の行商の声に「さすがイカの本場は安い！」と思い、刺身にして食べたら、もどすわ、下すわ、熱が出るわで3日ほど寝込んだというハプニングも。しかし、津軽海峡沿いの7kmにもおよぶ連続露頭は圧巻、恐山起源の火砕流や洞爺カルデラ由来の火山灰など自然のスケールの大きさはもとより、大学院生の観察力と野外調査の精度の高さに驚愕する日々でした。このように、岩崎氏の厚意によって、大巡検の本番も無事に案内役を務めることができ、

その成果は中巡検の那須野原扇状地に引き継がれました。ここでは小池先生と初めてフィールドワークに同行させていただき、洗礼ともいべき超辛口のコメントもいただいて、さらに地形学とくに火山麓の地形発達史への関心が高まりました。下北半島で過ごしたおよそ3週間の熱い時間と小池先生の叱咤激励を含む自然ゼミ

での経験が、間違いなく自分の財産となり、卒論や修論だけでなくその後の進路の方向性を決定づけることとなりました。すっかりフィールドから遠ざかった今でも、クリノメーターとフィールドノートはいつでも出動可能。露頭を見かけるとつい足を止めハンマーを持ち出す自分があります。

## あるお天気キャスターの20年前の出来事

平井 史生（1988年卒）

昭和59年の冬は記録的な寒さで、東京では26回も雪が降った。駒澤大学文学部の入学試験の日は、2月13日の月曜日だったが、前日からの雪の影響もあって入試の日の交通機関は大きく乱れた。千葉県の自宅から駒澤大学まで、通常でも1時間40分程度はかかるのに、バスや鉄道の遅れから2時間半以上を費やした。正門前に着いたとき、すでに受付終了時刻から40分を過ぎており、首を垂れて、落胆のため息をついた。そこに、「まだ間に合うよ！いそいで」と入試係員の声。試験会場である7号館1階の階段教場まで全力で走る。受験番号は「40899」。私の席は最下段の入り口に一番近いところにあった。横には試験官の先生がいて、「君、間に合ったね。さ、解答用紙に番号と名前を書いて」とひと言。席についた時に試験開始のベルが鳴る。受験案内には「試験への遅刻は15分までみとめる」とあった。雪の影響を考慮した大学側が試験開始を30分遅らせたことにより、ギリギリで間に合ったことになる。試験の出来ばえは良く

なかったようで、当時の日記には「英語難」「浪人決定的」「不勉強」などの言葉が並んでいる。

駒澤地理を第一志望としたのは、首都圏でもっとも教員スタッフが充実していると聞いていたからである。小学校の頃から地理は得意で、先生に頼まれて黒板に日本地図を書くことが良くあった。中学校では、高等学校用の詳細な地図帳をつかっていた。次第に生意気になり、高校では「先生より俺の方が詳しい！」というありさま。どうせ大学に行くのなら、地理の授業が一番多いところに行こうと考えるのは自然なことであった。

当時の地理学科の学生は遠くからでも見分けがついた。アジャスターと呼ばれる円筒形の地図ケース（本来は製図ケース）を持ち歩いていたからである。コーティング加工されていない地図を折ると傷んでしまうので、大きい地図でもくるくると丸めてケースにおさめる。斜めに紐を肩にかけ、侍のように教場から教場に地図を運んで実習の講義を受けることになる。他学

科からみると妙な外見だったろう。最近ではロットリングやスクリーントーンはあまり使われなくなったようだ。作図はパソコンでもできるし、データはUSBメモリーで持ち運べば良い。便利になった反面、寂しさも感じる。

昭和59年2月23日の木曜日も朝から雪が降っていた。正門前の掲示板に「40899」の番号を見つけたときの感動はいまでも忘れていない。地理学科で読図法や作画法を学び、気象学の世界に入っていくことになった。学生当時、物理公式なんて良く分からなかったが、天気図は「空

気の地形図」であるわけで、高気圧は緩やかな高原であり、低気圧はすり鉢状の深くぼ地である。専門家用の特殊な天気図でみると寒冷前線は断層崖みたいなものである。テレビで気象解説をするようになって10年になるが、毎年受験シーズンになると、受験生向けにコメントするようにしている。「遅れても試験会場に行ってください。大雪のときは開始時刻を遅らせることがありますから。また試験会場まで走るときは、指を冷やさないように。あたためてください。」と。

## 「文化地理」との出会い

山田 憲昭（1989年卒）

私は、大学を卒業してすぐ地元の大分県に戻り、高校の教員を務めている。県南の佐伯市、中央の別府市、そして現在は、県北の豊後高田市の県立高田高等学校に赴任している。高田高校は、県下で唯一の商業科と普通科が併設されている活気のある学校である。

高田は、宇佐神宮の東隣で国東半島の北の出口に位置している。国東の六郷満山文化の中心地で、山岳宗教の修験道や富貴寺・熊野磨崖仏もあり文化の香る里として発達してきた。最近では、なつかしい昭和の町づくりで、商店街の活性化と観光地としての復権がなされている。

地理学科に在学中、当時としては珍しかったであろう「文化地理学」の講座のK教授は、九州の出身でした（だいぶ前に亡くなられた）。教授はアメリカの大学院を終了しており、原書講

読のような英文の教科書のコピーを次々と大量にいただいた。大変に少人数での講義であり、懇切丁寧であった。

rural と urban など主要な人文地理学のテーマについて、熱弁を振るわれた。教授のフィールドは、バングラディッシュと南インドの農村であった。他大学の学部の際の卒論が自然地理だったらしく、その素養を活かしたバングラディッシュの水位上昇と国土の水没の関係図が印象に残っている。また、地域の土地利用図の美しさもである。

毎年のように現地に行かれ、学科の「駒沢地理」や「地域学研究」などの雑誌に英語で論文を掲載しておられた。当然、アメリカ在住の教授に雑誌を送るなど、個人レベルでも頻繁に学術交流をされていたようだ。グローバルに行動

する地理学者であった。

3年次の巡検Ⅱは、五箇山のK教授を選択した。個人旅行では行きそうにないことが、選んだ動機にあった。評価が厳しいなど先輩方のアドバイスがあったが、友人を無理に誘った。

巡検は、現地集合で現地解散、現地でレポートを完成しなくてはいけなかった。教授は「レポートを帰りの飛行機便で読むことだけが楽しみだ」と、話されていた。教授は、やはり地元を知り合いの方がおられて、山村の現状と課題、山村の未来などについて真剣に議論をされていたようだ。

一方、私たち学生は、一晩にあんなに多くの原稿用紙を埋めることが可能なのだと、当時は呆れ返っていたことを思い出す。帰りの列車の便で、友人が富山の駅弁「ますのすし」を紹介してくれた。先日も、地元のデパートの駅弁フ

エアーのとき、懐かしい鱈寿司を買った。

当時も、環境地理・気候・経済地理・応用地理など魅力のある講座が多くあった。個性的な教授が数多くおられ、その真摯な学問への姿勢や人間性に感銘を受けた。しかも、当時のカリキュラムは、自然地理学と人文地理学の両方の分野が基礎から演習まであり・専門科目も選択の幅が広がった。教員になった今でも、大きな財産になっている。

地理研・集落・山村・自然の4つの学科のゼミ（私は自然地理研究会）での活動や院生との交流もよい思い出です。最後に、小生にこのような機会を与えていただき、感謝しています。今後も、地方から駒澤大学文学部地理学科の益々の御発展を祈りながら、お祝いとさせていただきます。

## 変わるもの、変わらないもの

神代 隆文（1990年卒）

いわゆる「バブル」景気の絶頂期に私は学部  
に在学していた。時代が昭和から平成に移り変わる前後の頃だ。就職も売り手市場で、「青田刈り」はもちろのこと「困り込み」のため、入社前に海外旅行に招待された者もいた。地味な校風の駒澤にも華やかさと少し浮ついた雰囲気  
が流れていた。そんな時代だった。

巡検をはじめとするフィールドワークなくして地理学科は語れない。最初の巡検（2年次）は、高木正博先生指導のもと信州の斑尾高原へ。

池にボートを浮かべ、湖底の地形や流入水の観測、ハンドボーリングなどを経験した。夜ミーティング（飲み会）の翌朝はお決まりの二日酔い。そんな学生ぶりであったが、これをきっかけに同行の渡辺君（現鹿児島奄美高校）とともに、高木先生の二ヶ領用水の調査のお手伝いをさせていただいた。このことは、思い出以上に、後年河川環境整備事業に携わった私にとって、たいへん役に立っている。

次の巡検（3年次）も、信州の伊那谷へ。新

進気鋭の土谷敏治先生最初の巡検とあって、厳しい指導のもと、出来映えは別として報告書づくりには熱が入った。この時から付き合いのある山岸君（現四日市市役所）は、都市計画畑を歩み、現在地元で市民参加のまちづくりに活躍中である。

**卒業論文**では、長沼信夫先生にお世話になった。ゼミ生は伊豆の戸田で合宿を行ったが、お酒をたしなまれない先生を、私を含む二人の大虎が明け方近くまで付き合わせてしまい、それに寛大に対応してくださった先生には、今でも頭が上がらない。先生には、大学院でもご指導をいただいた。その頃、様々な図面作成のお手伝いをさせていただいたが、当時はまだ今のようにパソコンで簡単にお絵かきができる状況でなく、表現したいことをイメージしながら、トレーシングペーパーにロットリング（製図ペン）やスクリーントーンを駆使して作図したことを思い出す。表現の自由度においては、手描きの方が上だと思うのは旧人類だろうか。

“**四ゼミ**”と称する、正規の団体とは別に地理学関係の任意のサークルが4つあったことについて触れておきたい。私のいた「地理学研究

クラブ」は特定の対象を持たなかったが、他は自然、集落、山村という対象を持ち、それぞれ活発に巡検を行っていた。全国各地を様々なテーマで歩いた。現在では“四ゼミ”は全て無くなったと聞いているが、今でも続いている同窓生との付き合いは、この“四ゼミ”を母胎としていることを考えると、時代とはいえ、少し寂しい気もする。

**現在の私は**、「造園」という職種で地方の市役所におり、専ら、公園や緑地に関わる仕事をしている。「地理学」を専攻したと言うと怪訝そうな顔をされるが、「景観（landscape）」というキーワード、フィールドワーク、理系文系という枠に収まらないという点で、造園学とは非常に近い間柄だと思っている。どちらも技術集団というよりも、ある種の思想集団なのだ。名を変え、態を変えてもその思想的な部分は変わらず受け継がれていくのではないだろうか。東京を離れ、大学やお世話になった方々へは義理を欠いているが、今後何らかの形で恩返しできる機会があればと思っている。今後の母校地理学科の発展と同窓生の益々の活躍を願ってやまない。

## 大学時代の思い出

### 加藤 丈晴（1990年卒）

大学を卒業してから早や14年が経とうとしています。今では社会人としての年数の方が大学生生活の3倍を超え、学生生活も遠い昔のことになりつつありますが、私の頭の中には、大学

時代の楽しい思い出は少しも色あせることなく、新しいままで保存されています。

すっかり時が経った今でも、暇さえあれば学生時代の友人と会っているせいなのかもしれま

せん。私の大学生生活は、地理学科の友人と遊び、趣味の楽器（クラシックギター）に没頭し、暇さえあれば旅行し、適当にアルバイトをこなし、そしてテスト前になると少し勉強する・・・というような、両親や他人から見ればあきれられるほど遊んでばかりいた時代でした。授業内容などはすっかり忘れてしまいましたが、私の人生に大きな影響を与える友人は、みな、大学生活に得た友人ばかりです。現在、毎日を基本的に明るい気持ちで生きていられるのは、この、多くの素晴らしい友人が存在するからです。その意味でも私にとっては、あの時代は今に至る人生を形成した貴重な時間でした。

地理学科において学んだ事柄で、現在の生活においては直接的に役に立っている知識は残念ながらあまりありませんが、今でも旅行をして自然に触れると、地理学科の仲間達と行った巡検を思い出します。私は2年生では長野県、そして3年生では四国に行きました。レポートを書き、グループで課題を決めて発表、等、授業らしいことも一応しましたが、今思えば、あれはやはり仲間との楽しい旅行でした。巡検の日程前に早々と出発し、夜は夜で酒を飲んで遅くまで大いに騒ぎ、そして巡検解散後も仲間とあちこち周遊しました。授業の巡検だけでなく、私は仲間達と旅行あるいはスキーなど、旅は数多くしましたが、どれも素晴らしい思い出として脳裏に焼き付いています。そして嬉しいのは、当時の仲間の何人かがグループ内で夫婦になり、家族になり、1年に1回は皆で集合して、あの

頃と同様のことを今でも同窓会として実行していることです。同級生だけでなく、当時お世話になった先生も呼んで、毎年楽しく開催しています。

もう1つ、先にも述べたように、私は学生時代に自分の趣味（クラシックギター）に没頭しました。ギターは小学校の頃から継続していましたが、大学のギタークラブに入部したことをきっかけに、クラブOBのプロギタリストに師事しました。時には丸1日続くような厳しいレッスンもありましたが、そのかいあって2年生の時に全国学生ギターコンクールで優勝することができました。その後、社会人となってからも別のコンクールで優勝することができ、現在は会社員のかたわらギタリストとして一定の活動を続けていますが、現在の活動はすべて学生時代に培った素養の上に存在します。そしてこの活動が、毎日の生活に活力と自信をもたらしてくれています。

大学生生活はそれまでの私の人生を転換させ、素晴らしい思い出と知識、技術、そして数多くの友人を与えてくれました。そして今を生きる活力の源となっています。まさに「一生の財産」を得ることができた貴重な時代でした。「もう一度学生時代に戻りたい」という考えは湧いてきませんが、今後とも学生時代に得た事柄を基礎に、それをさらに発展、進歩させて人生の糧にすることができれば、これに勝る幸せはないと考えています。

## 大学生活を振り返って

安達 茂（1992年卒）

昭和63年4月、新入生として初めて駒澤大学の門をくぐった。受験当時から駒澤のキャンパス・立地・校風に惹かれ、ワクワクした気持ちで入学式を迎えたことを思い出す。入学式当日、サークルの勧誘や風変わりな立て看板を横目に見つつ会場へ入ると、そこには線香の香りが漂っていた。駒澤大学が仏教大学であるということを実感した瞬間であった。こうして、期待と不安で膨らんだ学部4年間大学院2年間の大学生活がスタートした。

学部の4年間は、今でも大切な友人との出会いがあった。地理学科はもともと人数が少なく、巡検等で共に過ごす時間が長いこともあり、結束力が強くなる。大学生といえばお酒が付き物であるが、私達も例外ではなくよく飲んだものである。お金の無かった私達が行く所は、安い居酒屋や下宿している友人の部屋がメインで、時には駒澤公園や学食の隅もよく利用した。カラオケボックスが登場したのもちょうどこの頃で、飲み会会場の定番となった。あの頃は皆夢を持ち、「卒業したらA社に就職したい」、「教員になりたい」、「結婚は何歳でしたい」等色々なことを夜更けまで語り合った。現実は厳しいものであったが……。

もちろん勉学にも励んだ。私は、自然地理学（特に地形学）に興味を持ち、サークルも自然地理学研究会に所属していた。地形の調査においてはその形成過程や形成時期の特定が重要であるが、その指標となる物のひとつに火山灰が

ある。調査地でお目当ての火山灰が見つかる、まるで宝物でも見つけたかのように喜び、その晩のお酒は格別に旨かった。そして、その火山灰による編年から地形の概要が見えてくると、まるで学者にでもなったかのような満足感があった。あの頃はつくづく若かったものである。

大学院の2年間は、大学生活が集約された2年間でもある。地形学を専攻し、火山麓扇状地を研究していた私は、北は北海道の利尻島、南は九州の雲仙と日本中を調査して回った。私の調査地は火山地域ということもあり、とにかく自然が残っていて、景色や空気そして人とのふれ合いなど今でも心に深く刻まれている。なかでも思い出深いのは、修士論文の中心調査地でもある群馬県赤城火山と、当時火砕流で有名になった雲仙普賢岳である。赤城には2年間を通して、本当に何度も足を運んだ。火山麓扇状地の形成過程を知るために、土石流堆積物を求めて、毎日毎日歩き回った。これだという露頭を見つけると、1日中その露頭に張り付き調査を行った。

雲仙へは2度足を運んだ。1度目は大規模火砕流の直後で、まだ活発に活動していたため、調査中は本当に命の危険を感じた。テレビで観ていた光景が目の前に現実として広がり、普賢岳はうなりをあげていた。2度目はその翌年で、普賢岳の活動も末期で、土石流による被害が著しかった。前年にはあったはずの家が屋根だけしか見えず、国道も寸断されていた、普賢岳の

火砕流はその規模としては大きなものではないが、実際の被害の大きさに、自然災害の恐ろしさを痛感した。そして、これらの調査を経て集大成でもある修士論文を書き上げたのである。

今振り返ると、大学生活の6年間はあっという間に過ぎ去り、まるで夢であったかのようにもあるが、かけがえのない青春そのものであつた。

現在の私は地理学とはかけ離れた一職人として働いているが、大学時代の思い出は深く心に刻まれ、その教えや経験は私の基礎となっている。

最後に、このような機会を与えて下さった方々に感謝し、地理学科の益々の隆盛を祈念して、75周年をお祝い致します。

## 地理学科の思い出

### 丸山 哲也（1992年卒）

美術系専門学校を目指していた高校3年、周囲のすすめで大学進学に転換したが、世の中甘くなく浪人生活を送ることとなった。

現役時は無難に法律・経済学部を受験したが、浪人中に学芸員資格取得に興味を持ち、文学部を、しかも単なる興味本位で地理学科に進んだ。高校では半年程地理の授業があっただけで、世界史受験の私は基礎知識も乏しく、講義についていけず高校の教科書を読み直したりもした。しかし新鮮で、自然・人文に拘らず興味をもった地域には実際にオートバイで訪れるようになった。

だが体を壊して、あまり大学に行かなくなつたうえ、地理学科の科目と博物館学芸員講座科目とは重複する科目がなく、地理の勉強はおろそかになりがちだった。

とはいうものの、巡検、製図、測量学等の実技はとても印象に残っている。

早船先生には地図の彩色や作図を事細かに指導していただいた。面白かったので課題をすぐ

におわらせてしまい、友人の手伝いもした。

巡検は土谷先生と小池先生にお世話になった。土谷先生ご指導のもと、初夏の北海道釧路市へ足を踏み入れた。土谷先生は各自でテーマを決めて調査するというスタイルで戸惑ったが、釧路＝漁業と短絡的思考でさびれた漁港を歩き回った。

霧の町釧路というだけあって滞在中毎日霧に覆われ寂しい巡検であったが、解散後仲間とレンタカーで1日600kmも走りまわり（追加料金を取られたが）、釧路湿原、回陽台など釧路の大自然を思いっきり堪能した。その時の印象が強く、今でもバイクで北海道を走っている。

小池先生とは秋の素晴らしい紅葉のシーズンに大町、上高地を巡った。露頭に登ったり、フォッサマグナを目の当たりにしたりした。夜は先生も混ざって、関西の看護学校の団体旅行と一緒に盛り上がった。小池先生には卒業後も博物館立ち上げの際にお世話になった。

卒論は、人気のゼミに漏れ、故菱口善美先生

に指導していただいた。とても苦手な先生であったが、「地理は帝王学である」という先生の持論には深い感銘をうけた。経済でも法律でも、どんな科目でも「〇〇地理学」として取り込んでしまうのだ。そう考えると、大学での勉強は実社会では役に立たないと言われがちだが、地理学は生活に結びついていて公私共に役立って

いるように思う。

旅先でも地形から植生、産業や町並み等、様々な角度からとらえるようになった。

困ったことは、「地理学科にカーナビは不要」と見栄を張ってしまうことだ。

本当はお金がないだけなのだが・・・

## 楽しかった六十の手習い

持田 実（1996年卒）

平成3年春、私はある都市銀行に籍を置いていました。その頃は子会社に出向し、60歳定年を、間近に迎えていました。周りの同僚も同輩のものが多く、60歳定年といっても実際には65歳まで、嘱託として働ける環境にいました。

ある時、書店で「社会人のための大学受験」という本をみつけ、パラパラと立ち読みするうちに、忽然と大学に行こうという気分になりさっそく行動に移しました。ハードルは、今後の経済的裏付けと家族の理解ですが子供は既に成長して社会人に、学費と生活費は、貯えと年金収入、仕事を持っている妻の収入もあって、なんとかなりそうだし、幸いに妻も退職して学生になることに理解を示し、応援さえしてくれました。

今更、法律や経済でもないと、子供の頃から好きだった地理学を探求しようと、一途に駒澤大学をめざしました。

受験科目は、英語と小論文それに面接です。

英語は高校生用の参考書を、1日2時間位、

何回も何回も繰り返し学習し、試験に臨みました。10月10日祝日、入試の日、午前中に英語と小論文（論題は「地理学とは、いかなる科学か、私見を述べよ」）、午後から面接（早船先生、長沼先生、小田先生）。その頃には、午前中の試験結果の連絡もあったでしょうが、私の向学心を汲みとっていただいたのか、面接途中から入学後の心得や、激励といった雰囲気になり、どうやらいけそうな手応えを、感じた事を覚えています。

ほどなく、合格通知がきて、4月から1年生として、通学を始めました。勿論3月末で退職しました。何の未練もありませんでした。

正に六十の手習いを始めたわけです。六十の手習いとは、60歳に達して新しくものをはじめることではない。若い時から手がけてきたことを、老年になって最初から、やり直すことをいうのだと、エッセイストの白洲正子氏は、著書の一節で述べています。

今、探し求めている生涯学習の道を、一步踏

み出したのです。学費も定期券代も、自分で負担している自覚は授業もおろそかに出来ません。それだけでもないでしょうが、学校が楽しく、ほぼ100%講義に出席し、丹念にノートをとり、復習と予習で、衰える記憶力をカバーしてきました。

4年間はあっという間に過ぎ、アルバイトやクラブ活動に忙しい(?)学友達と少し違った学生生活でしたが、卒業式では、地理学科総代として、学長から賞状と記念品を受けることが出来ました。

一番の思い出は、卒業論文で「日光道中における宿場町の歴史地理的考察」と題し、実際に日本橋から日光まで36里(141.27キロ)を歩き

通しました。現在、日本橋から宇都宮を経て仙台方面に至る国道4号線がほぼ日光通(奥州道)に沿っていますが、随所に旧道もあって、僅かながら昔の面影を残しております。

なお、卒業の年3月に、東京学芸大学で行われた、日本地理教育学会主催の第44回全国地理専攻生卒業論文発表大会に、ご指導いただいた、長野先生の推薦で出場し、成果を発表することが出来ました。

人生の転機に、自分に投資し、充電し、生涯教育の指針を見つけることが出来たこと、今振り返って、懐かしく楽しい学生生活でありました。

## 自然地理学研究会と私

### 有賀 俊正(1996年卒)

地形に興味を持っていた私は、高校2年の進路指導でみた学校案内の地理学科のページに写っていた巡検中の学生の写真に憧れ、地理学科へ進学することを決めました。しかし、入学後、学科の巡検が2年までないことを知った私は、「自然地理学研究会(通称:自然ゼミ)」に入ることにしました。5月には初めての巡検に参加し、希望通り、一般教養ばかりの学部1年目から地理学にどっぷり漬かることができました。そして、自然ゼミの活動は私の大学生生活そのものになっていきました。

自然ゼミに所属したおかげで、他の学生では4年間で2回しかない巡検に年に何度も行く事

ができました。2年生までは、先輩のあとについて回るだけでよかったのですが、3年生になると、巡検内容や巡検地を決める立場となり、卒論の予行練習としても良い経験になりました。何よりも、仲間と過ごした時間は楽しく、巡検中のいろいろな出来事は大切な思い出となっています。

ゼミを通して、いろいろな先生方にも出会うことができました。2年生のときにはゼミの先輩の紹介で、当時自然科学教室に在籍されていた漆原和子先生のもとでアルバイトを始めました。私は、現地調査の手伝いと採取したサンプルの処理が主な仕事だったので、巡検に参加す

るための費用を稼ぐと同時に調査方法を学ぶ機会にもなりました。長沼信夫先生に卒論を指導して頂こうと決めたのも、水文学に興味を持ち始めた私に先輩から、3年生の学科の巡検では長沼先生の巡検に参加したほうが良いとアドバイスをもらったことがきっかけでした。2年生の時に履修していた水文学の講義での長沼先生の影響は、非常に厳しい先生という印象でしたが、巡検での調査方法について質問に行くと、講義中とは異なり、非常に丁寧に説明してくれました。自然ゼミの夏の巡検でも、相談に乗って頂き、卒論は長沼先生に指導して頂こうと決めました。長沼先生には、その後、修士課程でも指導して頂きました。要領の悪い私が修士課程を修了できたのは長沼先生のおかげであると感謝しています。

在学中を振り返ると、私は、自然ゼミを通して先生や仲間に出会い、様々な体験をしました。充実した大学生活を送ることができたのは自然ゼミのおかげであることは間違いありません。しかし、その自然ゼミはもう存在しません。地理学科に入学した学生が、自主的に巡検や調査をする機会が失われたことは非常に残念なことです。

現在、私は中学校・高校で講師をしています。授業中に在学中の、特にゼミの巡検で体験したことをよく話しています。先日、高校2年生が地理学科に進学したいと話してくれました。自分の授業や体験談から地理学に興味をもつ生徒がいることは非常に嬉しいものです。これから、在学中に学んできたことを生かして、地理学の魅力を伝えていきたいと思っています。

## 文学部地理学科での思い出

武田 大典（1997年卒）

「大学生活の中で、最先端の学問の世界がどういうものであるかという事、その入り口を覗くことが出来たなら、それは価値のある素晴らしいことです」この言葉は私のゼミの恩師である小池先生が一年間の地形学の講義を通して最後に締めくくりに述べられた言葉です。卒業後、しばらくが過ぎましたが、その頃を今に振り返りますと、地理学科には、学問の入り口に触れさせてくれる素晴らしい先生方スタッフと仲間が居て、かけがえのない学生生活を送れたなあと感じます。当時の思い出の一つをここに

ご紹介させて頂ければと思います。

学生時代を振り返り地理学科と言えばやはり野外巡検でしょうか。私は学部2年生の時に橋詰先生のご指導で神奈川県の実鶴に、学部3年生の時に中村先生のご指導で新潟県の小千谷を訪れました。いずれの巡検でも貴重な体験をさせて頂きましたが、特に小千谷への巡検は忘れることが出来ないものです。当時、阪神淡路の大震災などがあり、地形学に興味を持った私は太田先生が講義をされていた変動地形学などを通して活断層や褶曲地形といったものを学んで

いました。そこで、私達のグループは小千谷市周辺の信濃川の活構造地形を巡検のテーマに選び準備に取り掛かりました。参考文献の整理や調査行程の検討といった作業は、決して慣れたものではありませんでしたが、中村先生や卒業生である先輩の柳田氏、清水氏のご指導を受けながら準備を進めていきました。しかし、野外調査の経験など仲間の中でしたことがある人はほとんど無く、クリノメーターやハンマーといった調査用具も講義で教わったものの、実際に使ったことなどありませんでした。こんな私達ではありましたが、巡検当日を迎えることになります。巡検当日は地元新潟の卒業生である米山氏も駆けつけて下さり、一から調査の手ほどきを受けながら野外調査を進めました。河岸段丘礫層のインプリケーションや断層、火山灰層といったものを野帖に記しながら大地が本当に動くんだということをこの目で実際に感じた感

動は今もはっきりと覚えています。大学に戻り調査の結果をまとめた成果資料を作成しましたが、その出来栄は、懇切丁寧なご指導のお陰もあって素晴らしいものになったように思います。そして、今振り返りますと何よりこの経験が基で地形学への興味が膨らみ、卒業論文の作成やその後の私の進路に対して大きな礎を築き、かけがえの無い貴重な財産となったように思います。



(写真) 学部3年次の野外巡検(小千谷)  
調査を伴にした仲間と柳田氏、米山氏、清水氏  
(1995年)

## 悔しかった思い出

### 北田 初男(1999年卒)

大学・大学院と6年間地理学を学ばせていただきました。他学部と比べ、みんなで共同作業をする機会が多く、いろいろな人に出会い共有の時間をともに出来たことが大きな自分の財産となっています。個人の研究では、綾瀬川をフィールドにして、水質調査には何度も行きました。水質汚濁と潮の干満の影響を調べるために1日フィールドで過ごし眠かったことや、採水するためのバケツを川へ流してしまった失敗な

どいろいろなことがありました。とくに、調査で一番印象に残っていることは、行く度に体中臭くなって帰ってきたことです。調査から帰ってきて、人に会うと臭い臭いといわれて大変でした。

話は変わりますが、大学時代は陸上競技部に所属しており、箱根駅伝には3度走らせてもらいました。2年の時に、初めて箱根駅伝を走る事ができました。個人では8区を走り区間2

位と快走し、総合優勝ではありませんが復路優勝をし、駒澤大学初の大学駅伝での優勝という2文字を飾ることが出来てとてもうれしかったです。2度目の箱根駅伝は、練習をしすぎてしまい慢性疲労になり、全く調子が悪いのに、昨年のような走りをしなければという思いが、自分に過度なプレッシャーをかけてしまい、箱根駅伝を前にして胃潰瘍になってしまいました。それを隠して、昨年同様の8区を走り、区間11位と大ブレーキ。チームは総合2位と過去最高順位になったものの、優勝を狙えるまでに成長したチームの足を引っ張ってしまい、多大な迷惑をかけてしまいました。最終学年の4年では、今までやってきた失敗を繰り返さないように心がけました。まずは、内臓の体調を戻すことに3ヶ月ほどかけました。それから、チームの目標である大学駅伝(出雲駅伝・全日本大学駅伝・箱根駅伝)完全制覇に向かって、じっくりと練習を積み、出雲駅伝・全日本大学駅伝と連勝す

ることが出来ました。あとは箱根駅伝というところまで来ました。しかし、1ヶ月ほど前になると主力選手の何人かが体調を崩しだし、自分



写真2 第75回 箱根駅伝

(東京箱根間往復大学駅伝競走) 権太坂 1999.1.3



写真1 第74回 箱根駅伝

(東京箱根間往復大学駅伝競走) 茅ヶ崎 1998.1.3



写真3 第75回 箱根駅伝

(東京箱根間往復大学駅伝競走)

保土ヶ谷 1999.1.3

も風邪を引いて約1週間寝込んでしまいました。史上2校目の大学駅伝完全制覇というプレッシャーに、チーム全体がやられてしまったのかもしれない。万全の体制で臨むことができなかった箱根駅伝は、本校初の往路優勝を果たし、総合優勝へ向けて、自分を含めて復路のメンバーに託されました。6区から8区までトップを守り自分に纏がまわりました。自分と2位の差は58秒あったので、自分の力を出せは追いつかれないと思い走りましたが、相手の区間新の走

りに敗れ、抜かれてしまいました。チームはそのまま2位でゴールし、大学駅伝完全制覇の夢は破れ、悔しい思いでいっぱいでした。箱根駅伝の優勝の夢は、次の年に後輩によって実現し、とても嬉しく思っています。

駅伝をしていて抜かれたことは後にも先にもこの1度だけです。あの悔しい思いは忘れることが出来ず今でも、つい最近のこのように思い出します。

## 大学生活を振り返って

### 矢部 順子 (2001年卒)

大学時代に一番熱中したこと、それは「旅」です。私が地理学科に入学したのは、「旅行が好き」という本当に単純な理由でした。とにかく色々な所に行くのが好きで、大学に入学してからはアルバイトで貯めたお金を旅費に注ぎ込み、日本各地をよく一人で旅をしていました。

旅先では、今まで見たことのない雄大な自然や、歴史のある寺院・城などに感動し、また、その土地ならではの特産品を教えてもらったりすることで地元の人々と触れ合えるのも楽しみの一つでした。

旅好きの私が授業で楽しみにしていたのは巡検です。大学3年生の秋には「茶畑の分布」を調べに鹿児島へ行きました。現地調査ではグループを組んで土地の区画を一つ一つ丁寧に調べました。農家の人にインタビューをして新しい

情報を得られたこともあり、地図や授業からは分からないことをたくさん学べました。グループを組むことで責任感や行動力も生まれ、社会勉強にもなりました。

大学に入ってからすぐ、同じ学科の仲の良い友人を中心にソフトボールのサークルを作ったことも良い思い出です。初めは15人程度だったものの、後輩もたくさん入り、現在のメンバー数は50人にもものぼります。

合宿や他のサークルとの試合を企画していくことで連帯感が生まれ、それをクリアした時にみんなで達成感を得ることができ、とても嬉しかったです。

卒業してみんなそれぞれの道を歩み始め、なかなか会えなくなりましたが、何より

もお互い同じような趣味を持った地理学科の仲間に出会えたことに感謝しています。何年後かは分かりませんが、同窓会で大学時代の思い出に花を咲かせられれば・・・と密かに期待しています。



(写真) ソフトボールのサークルの仲間たち

## 思い出の記

中山 紗恵子 (2002 年卒業)

地理学科では、それまでの生活では未経験のことばかり経験することができました。入学当初は異次元の世界に迷い込んだかのような気分でしたが、卒業する頃には自分も地理の世界にすっかりはまり、感動の機会に恵まれた4年間を過ごすことができました。地理学科ならではのことが今も思い出されます。

内容が濃く印象に残るのが、地形学実習です。半期1単位の選択科目でしたが、私を大きく地理好きに変えた授業でした。私にとって初めての巡検もこの授業で、日曜日に国分寺崖線や青梅の地形を見て回ったり、普段の授業では等々力溪谷まで行ったりしました。単位を取るためだけに授業に出るのではつまらないけど、楽しいから授業に出るのが地理学科の授業なんだな、と気づくことができました。

ちょうど良い地図がなければ自ら作ればよいことを覚え、巡検に行けば授業であることを毎回忘れて楽しい時間を過ごしました。地形図を



写真1 地形学実習(青梅・多摩川)1999年

片手に歩いて回ったり、夏休みに肌を焦がしながら川原の石の大きさを測って川沿いを移動したり。学校外で出かけた場所でも地理への興味は増し、パリではきれいな街並みに、北欧では壮大な氷河地形に感動しました。そして、同

じ感動を共有できる生涯の友人に出会うこともできました。

楽しい4年間だったな、それが私の一番の感想です。